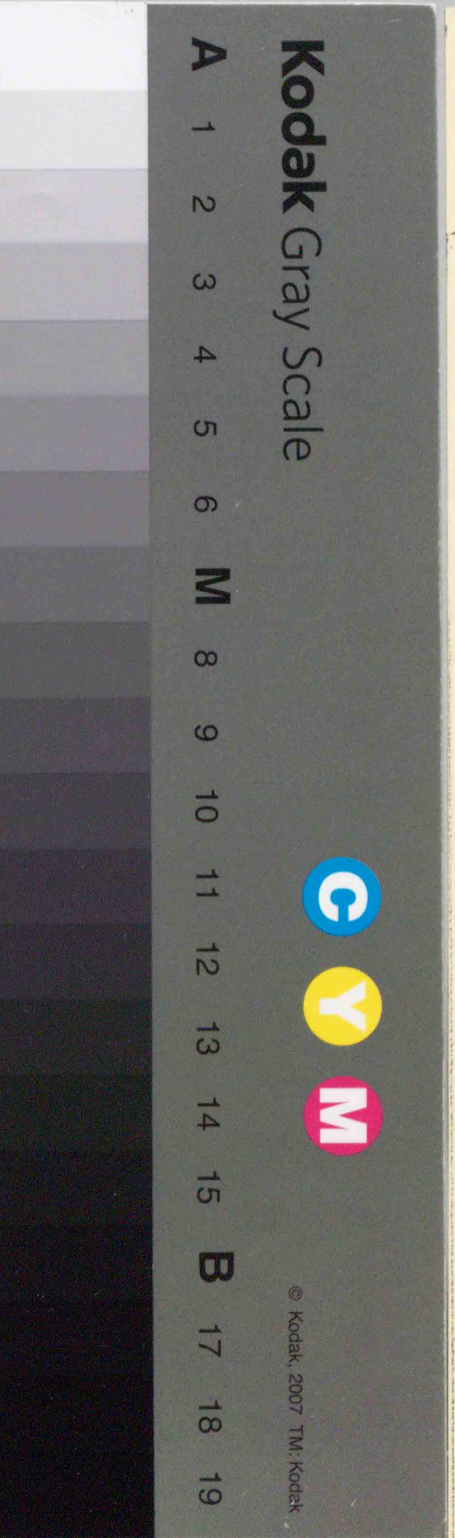
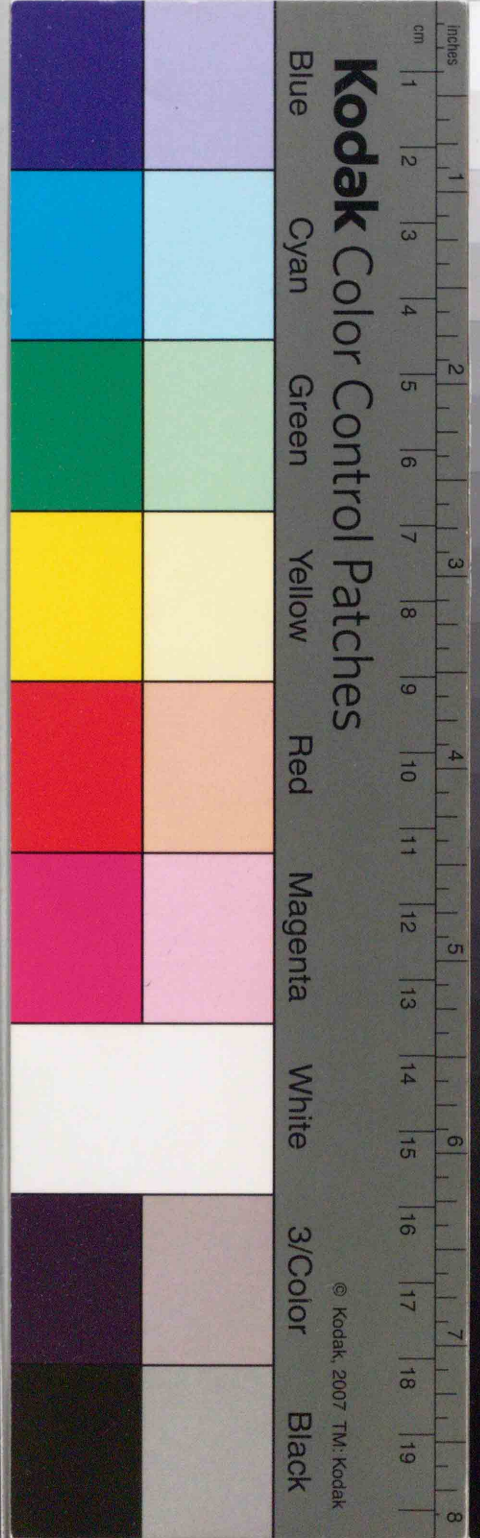


375.9
Ha7
資料室

訂改
帝國新讀本
卷九



41677

教科書文庫

4
810
41-1927
200030 2697



資料室

375.9

H27

文部省檢定

中學國語科用

昭和二年十月二十七日

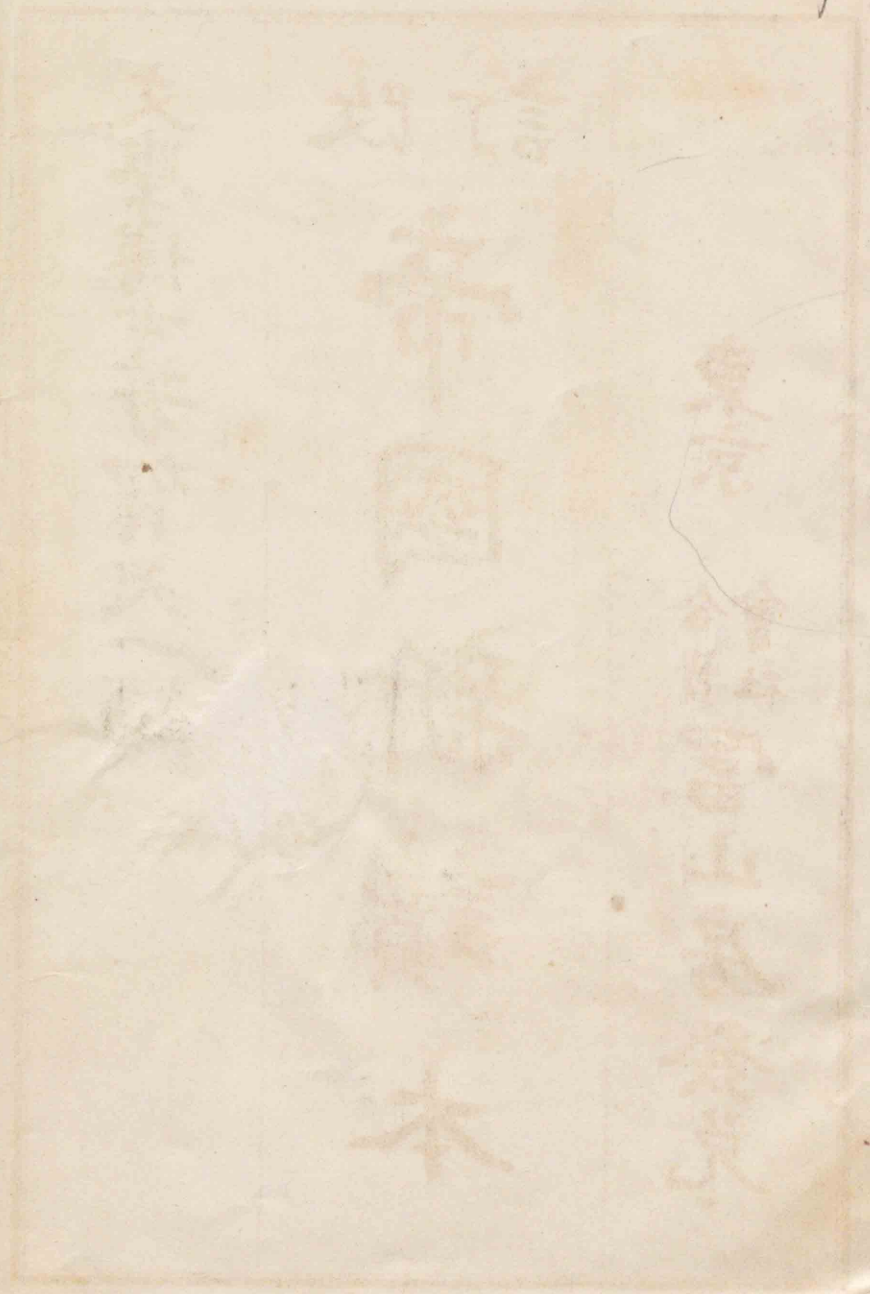
文學博士芳賀矢一編

改訂 帝國新讀本

東京

合資
會社

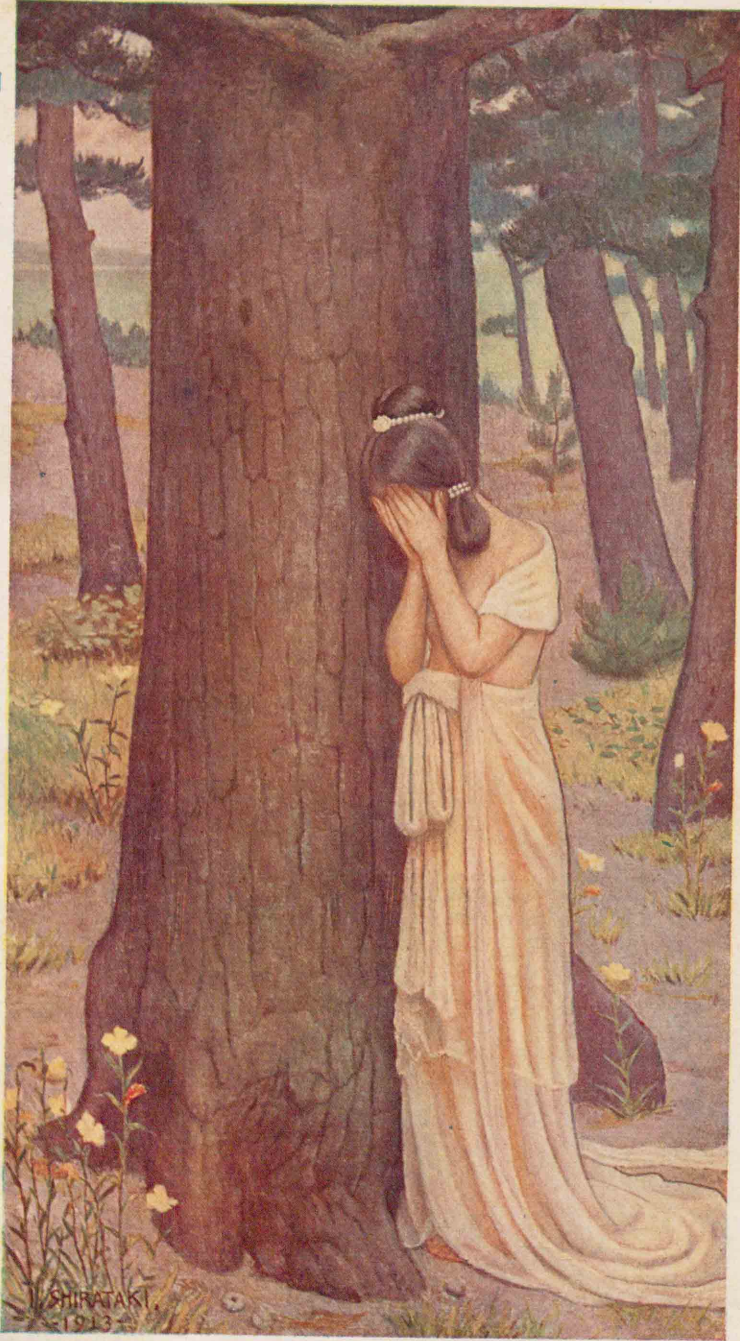
富山房發兌



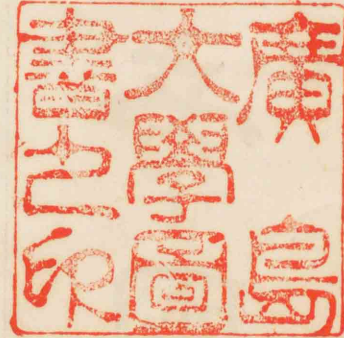
羽

衣

白瀧幾之助筆



一
一
羽
衣



訂改 帝國新讀本 卷九目次

一	朗詠……………	一
二	菅公の左遷……………	(大) 鏡……………五
三	みくにまなび……………	平田篤胤……………七
	逆境の恩寵(自修文)……………	加藤玄智……………二
四	神武天皇と後醍醐天皇……………	幸田露伴……………二六
五	東洋の詩興……………	夏目漱石……………二
六	李 白……………	國枝史郎……………二六
七	新島守その一……………	(増) 鏡……………三六
八	新島守その二……………	(増) 鏡……………四三
九	東下り……………	(伊勢物語)……………五〇

一〇 富嶽の詩神を懐ふ……………北村透谷…三
 一一 羽衣……………(謠) 曲…五
 羽衣の傳説(自修文)……………三
 一二 御堂關白……………(天) 鏡…六
 一三 千里が竹……………近松門左衛門…七
 教化上より見た近松(自修文)……………藤村 作…七
 一四 月前納涼……………本居宣長…八
 一五 蓮を栽う……………伴 蒿 蹊…六
 一六 世界の四聖……………高山林次郎…八
 一七 道まなぶ人……………松平定信…七
 一八 石彫獅子の賦……………樽田 注 董…一〇三
 一九 芳宜園大人の靈を祭る……………村田春海…一〇八
 二〇 月は世々の形見……………室 鳩 巢…一一

二一 秋色を觀じて人事に及ぶその一……………三宅雪嶺…一六
 二二 秋色を觀じて人事に及ぶその二……………三宅雪嶺…二三
 自然と人間(自修文)……………成瀬無極…二六
 二三 東路の旅……………(東關紀行)…三四



訂改帝國新讀本 卷九

一朗詠

春興

野草芳菲紅錦地。遊絲繚亂碧羅天。

劉禹錫

もゝしきの大宮人は暇あれや

山部赤人

春夜

背燭共憐深夜月。路花同惜少年春。
はるの夜の闇はあやなし梅の花
色こそ見えね香やはかくるゝ

白居易

凡河内躬恒

(二)唐の詩人。

(一)唐の詩人。

野陽遊絲

夏之夜
 三伏
 三伏
 三伏
 三伏

(一)文人。天慶二年(二五九九)歿。

(二)平安時代の宮女。中務卿敦慶親王の女。

(三)唐の詩人。

(四)桓武天皇の皇子。

(五)歌人。天曆二年(一六〇八年)歿、年六十。

納涼
 池冷水無三伏夏。 松高風有一聲秋。 源 英 明
 したくゞる水に秋こそ通ふらし
 むすぶ泉の手さへすゞしき 中 務

杜鵑 許 渾

一聲山鳥曙雲外。 萬點水螢秋草中。 許 渾
 さつきやみおぼつかなきを杜鵑
 なくなる聲のいとど遙けき 明日香皇子

ゆきやらで山路くらしつ杜鵑 源 公 忠
 いま一聲のきかまほしさに

秋興 白 居 易

林間煖酒燒紅葉。 石上題詩拂綠苔。 白 居 易
 秋はなほ夕まぐれこそたゞならね

(一)天延二年(一六三四年)歿、年九十六。
 あきかせに
 はつきりの
 ねそきこの
 なるたかた
 まつさをか
 けてきつら
 む 友 則
 山腰歸雁斜
 牽帶水面新
 虹未展巾中
 はるかすみ
 たつを見か
 りのゆきか
 さとにすみ
 やならへる
 い

(二)平安時代の文人。菅原道真の門人。

(三)文人。永觀元年(一六四三年)歿、年七十三。

をぎの上風 藤原義孝
 はぎの下露 八月十五夜
 三五夜中新月色
 二千里外故人心
 白居易 易
 十二廻中無勝 於此夕之好
 千萬里外皆爭 於吾家之光

あきかぜふはつものゆうよ
 りほたるはきりつるつるつる
 米とくとほら 文則
 山腰歸雁斜牽帶水面新虹
 未展巾 中

そらとくとつるつるつるつる
 ゆらゆらの花をうきとつるつる
 やなつとつる

水の面にてる月なみを數ふれば 源 順
 こよひど秋のものなかなりける

(筆成行原藤傳)集詠朗漢和

(一) 歌人、古今集撰者の一人。

(二) 儒者また能書家。村上天皇に仕へた。

(三) 儒者。冷泉天皇に仕へた。

(四) 平安時代の文人。

雪

雪似^カ鷺毛飛散亂。 人被鶴驚立徘徊。 白居易

雪ふれば木ごと花ぞ咲きにける。 紀友則

餞別

前途程遠馳思於雁山之暮雲。 大江朝綱

後會期遙露纓於鴻臚之曉淚。 橋直幹

おもひやる心ばかりはさはらじを。 源英明

なにか隔つらん峰のしら雲。 慶滋保胤

祝

嘉辰令月歡無極。 萬歲千秋樂未央。

長生殿裏春秋富。 不老門前日月遲。

君が代は千代にやちよにさゞれ石の

いはほととなりて苔のむすまで よみ人しらす

二 菅公の左遷

(一) 左大臣藤原時平。

醍醐の帝の御時^(一)時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くてお

はします。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。そのをり、帝

御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下さし

め給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九許なり、右大臣の御年

五十七八許にやおはしましけん、共に世の政をせしめ給ひしほど

に、右大臣はざえ世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきてもこ

との外に賢くおはします。左大臣は御年も若く、ざえもことの外に

劣り給へるによりて、右大臣御覚えことの外におはしましたるに、

左大臣安からず思したるほどに、さるべきにやおはしけん、右大臣

の御爲によからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十五日、太宰權帥

ざえ

になし奉りて、流され給ふ。

このおとゞ子供數多おはせしに、女君たちは婿どりし、男君たちは皆ほどほどにつけて、位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち、慕ひ泣きておはしければ、ちひさきはあへなんと、おほやけもゆるさしめ給ひしかば、ともにゐてくだり給ひしぞかし。おとゞいと悲しく思し召して、御前の梅の花を御覽じて、

こちふかばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

また亭子(一)の帝に聞えさせ給ふ、

ながれゆくわれはみくづになりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なき事によりて、かく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山

(一)宇多天皇讓位後、朱雀院に居を移して亭子院と號せられた。

崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細く思されて、

君がすむやどの梢をゆくゆくと

かくるゝまでもかへりみしはや

また播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ所に御やどりせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩いと悲し。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

—大鏡—

三 みくにまなび

平田 篤胤

學問にはいろいろある。その中に何の學問がいつち大きいぞといふに、ちと自分勝手のやうなれども、皇國即ち我が國の學問ほど、大きいものはないでござる。なぜといふに、まづ近く儒學と佛學と

うまや

の上で申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀むことを覚え、また左國史漢といつて、左傳といふもの、國語といふもの、史記といふもの、漢書といふものなどをあらあら讀んで、さて漢文を綴る方を覺えたり、そのふだんの口ずさみに、詩を作ることでも覺え、ともう儒者といつて通られるが、何のこれしきの書物を讀んで、これしきのことを覺ゆるに、さして難いことは、ありやいたさんでござる。大方世間の儒者は、皆このくらゐなものでござる。

さてその儒者に比べては、出家の方がよつほど廣い。なぜといふに、己が是非讀まねばならぬと極めた俗にいふ經文が五千餘卷、馬につけたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだところが、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の一倍もあるでござる。そののみならず、儒者は佛書を讀まんでも、事が缺

おもと

春秋命歴序
考をかきな
へてしりへ
に日本の神の
授けしから
の道から人
の得かて開
のめやも日
の本人そ開
き初ける嵐

八紘九野
天漢



平田篤嵐筆蹟

ぬによつて、とんと讀まず。たまさか佛書を讀む儒者もあれど、そりや百人に一人もない。僧徒はそれとことかはり、儒者のおもと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。また詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いでござる。

さて皇國の學問がいつち廣いといふ故は、右申す通り、儒學、佛學を始め、種々さまざまの學問があつて、その道々のことゝと事とが盡く皇國の學びごとに混雜して、譬へば、彼の八紘九野の水、天漢の流、これに注がずといふことなしといふ如くでござる。その通り入混つてある故に、人の心もそれに従つて移り、いづれを是とも、いづ

(一)唐の蘇軾の弟
轍。政和二年
(西曆一一一一
年七月一十四
日)

れを非ともわかちかねて、いはばまごついて居ることが多くある。それ故に、その混雜をつぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、その混雜をより分けて、眞の道の害となることをいひ顯さうとするについては、よく先方のことをも知らねばならず。かの唐人蘇子由といふものの、善與人言者、因其人之言、而爲之言、則天下之辯者服矣。云々と申したる如く、此方のことばかりいつたのはいかず。例へば、僧徒を論すには佛書でいふと、ぎうの音も出ず。儒者を論すには儒書で論ずれば、猫に追はれた鼠のやうにかしこまる。されば皇國の純らと正しい道を得ようとするには、それに心得なくてはかなはぬこととござる。殊にもろもろの學問の道、たとひ外國のことにしる、皇國人が學ぶからは、そのよきことを選んで、皇國の用にせうとのこととござる。さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をも、すべてみくにまなびといつても違はぬほどのことと、即ち

これが皇國人にして外國のことを學ぶものの心得でござる。

— 古道大意 —

逆境の恩寵 [自修文]

(一) 加藤 玄智

逆境の恩寵
ま、ならぬ境
遇の賜物。
(一)文學博士。陸
軍教授兼東京
帝國大學助教

新聞を賣りながら苦學する。牛乳を配達しながら學校に通ふ。いかにもつらい。朝も早く起きなければならぬ。夜も寝るのが遅くなる。その前後僅少な時間割いて學問を勉強しなければならない。どうも苦しい。これが華族の若様に生まれたなら、富豪の子弟であつたならば、時々愚痴も出る。女學生にしてもさうである。家が零落して父はすでに逝き、母は病身、女中も使はず、臺所の水仕事はいふに及ばず、幼い弟妹の世話までして學校に出なければならぬ。これが華族のお姫様であつたらばと、時に我と我が身を顧て、不幸の身をなつ涙も出よう。さあここだ。考へ直さなければならぬところはここだ。さういふ逆境が、却つてほんたうの人物を作り上げてくれるものである。所謂艱難汝を玉にすで、順境に在つてしたい放題のできるものは、遂に身を謬り易い。朝

うぶ
世の惡風に染
まな
沈淪す
落ちぶれる。

寢坊をする。毎日學校も遅刻する。金も多少は自由になるところから錢づかひも荒くなる。やれ活動寫真だ、やれカフェーだと勝手に遊び歩く。世間ではさういふうぶなものを引っかけようとして、網を張つて待つてをる惡魔が澤山ある。遂に墮落に墮落を重ねて、救ひ難い人生の深淵に沈淪し、有爲の一生を棒に振つてしまふものが少くない。かういふのは、その人個人の不幸といふばかりでなく、國家の立場からも大なる損失である。勿論順境に在るものが皆々さうといふわけではないが、動もすればさういふ魔の誘惑にかゝり易い。これに反して逆境にあるものは、生活に餘裕が少い。腕一本、脛一本でし上げなければ、獨り自分の一身が立ちゆかないばかりでなく、父母兄弟をも窮境に陥れる虞がある。どうしてもそんな悠長なことをしてはゐられない。自分だけでもどしどし勉強して、早くし上げてしまはなければならぬ。かういふ氣分だから、逆境に在る人は、學生にしても眞面目である。氣分に眞劍味を帯びてをる。石に嚙りついても成功しなければならぬといふ生存上の必要が、ひしひしと身に迫つて來てをる。この眞面目、この眞劍味、これが實に人を成功に導く偉大な

盤根錯節云々
一不遇盤根錯節。何以別利器乎。後漢書
(-)後漢書の撰者支那南北朝時代の宋人范曄のこと。
儋石の儲はへ。
蘊奥
奥底。
嶄然
一段高くぬきでた有様

黽勉
一心に努力する。
大器を晩成す
あわてず大才を作り上げる。
(二)儒者。京都の人。天和二年(二三四二年)歿。年六十五。



平田篤胤

懷を述べて

月花をわれもあはれと見てはあれど

あはれと歌ふひまなかりけり

といつてをられる。以て翁が貧賤の中から黽勉學にいそしまれ、以てその大器を晩成された苦心が想見されるのである。山崎闇齋が曾て會津侯保科正之に答

へて、自分には人の得知らぬ三つの樂みがあることを告げ、その一は、禽獸に生まれずして人間と生まれたこと、その二は、幸に亂世兵馬の間に生まれずして生を泰平の御世に享け、靜かに古書を繙いて古聖前賢とその心交を縦にすることを得ること、第三には、王侯の家に生まれて婦人の手に成長し 無意義な



山崎闇齋

一生を過すことなく、幸にも貧困に生まれて拮据勉強、辛苦を嘗めて學問をし、先王の道を學ぶことを得たこと、この三樂中、最後の一樂こそ實に貧賤に長じたものの天與の特權であると喝破し、以て會津侯を諷諫したといふのも、また這般の消息を能く傳へてをる。

獅子は己の生んだばかりの子を、まづ千尋の谷底に蹴落して、艱難に處する訓練を兒獅子に與へるとのことである。かくして百獸の王となる資格も自然養はれるのである。順境の生む悲喜劇、逆境の與へる天惠、達觀し來れば、眞に天公配劑の妙に驚かざるを得ない。

諷諫す
身上の人をそれとなくいひ諭す。
這般の。

天公配劑の妙
天帝造化の神の配りあはせの上手。

(一) 作者不明。

(二) Paul

ヘブライ人。有名な説教家。西曆六七年歿。

(三) 新約全書中の羅馬書第五章の句。

(四) 支那戰國時代の哲人で道德の論者。生死年は諸説不定。
(五) 告子章句下。拂亂す。會益す。だんだんふや

(六) 作者不明。

(一) 世の中は何につけても塞翁の

うまくは行かぬものところを知れ

しかもこのうまく行かぬところに妙味があり、大宇宙の深い教訓が含まれてをり、未來の偉人を生出す眞の訓練が存してをる。耶蘇の弟子パウロはこの點に關する自己の體驗を左の如く述べてをる。眞に味はふべきである。

(二) 艱難にも喜をなせり。蓋し艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は耻を來らせざるを知る。

(三) 支那の賢哲孟子はまた左の如く説いてをる、

(四) 天の將に大任をこの人に降さんとするや、必ずまづその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その體膚を餓し、その身を空乏にし、行その爲すところに拂亂す。心を動かし性を忍んで、その能くせざるところを會益する所以なり。

と。古歌にいはいはく、

(五) うき事のなほこの上につもれかし
かぎりある身の力ためさん

(一) 直越ともいふ。

(二) 大和國(奈良縣)鳥見の會長。一名登美毘古。

四 神武天皇と後醍醐天皇

幸田露伴

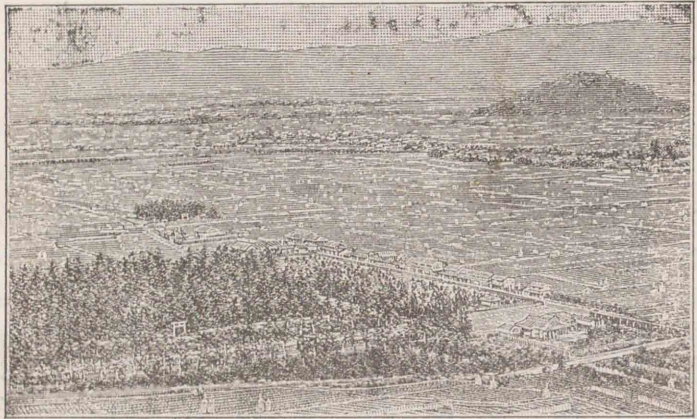
申すもいと畏けれど、我が邦創業の帝神武天皇、(一)孔舎衛坂の戦に御兄君五瀬命を敵の矢の爲に失ひ給ひて、甚だしく御憤懣(二)あらせられ、誓つて長髓彦に天誅を加へんとし給ひし御時は、いかに勇猛壯烈に大御心の思し給ひしがまゝを御製に述べ給ひしぞや。

みつみつし 久米の子等が 栗生には、かみら一もと、
そねがもと、そねめつなぎで、撃ちてしやまん。

と謠ひ給ひ、また

みつみつし 來目の子等が 垣本に、植ゑしはじかみ
口ひゞく。我はわすれじ、撃ちてしやまん。

と謠ひ給へる御威勢の烈しき、御心の猛々しき、薑を食へば餘味こ



り。

こにありて、我が口ここに疼む。我が兄
すでに撃たれぬ。我が心なほ痛む。忘れ
んや。忘れんや。おのれ醜虜、撃ち屠らで
はいかでか止まん。」と、御目に觸れし薑
に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやを
なし出で給へる、いさぎよしなんと申
すも畏き御製なり。

建武中興の帝後醍醐天皇は、これは
た申すも畏けれど、英明にわたらせ給
ひし御門なり。されどその御製の御心
御姿は、世の異なるがためもあるべけ
れど、いたく神武天皇のとはさま異な

秋ごとのならひと思ひし露しぐれ
ことしは袖の上にぞありける
と詠じ給へる、

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨

おとを聞くにもぬるゝ袖かな

とあそばされたる、臣子の分としては、我が日の本の皇帝のかゝる
御詠ありしかと思へば、恐ながら御痛はしさに涙はふり落ち、かゝ
る御詠のありたるその世いと恨めしく口惜し。

うづもるゝ身をば歎かずなべて世の

くもるぞつらきけさのはつ雪

の御製は、大御心の深く廣き、おろかなる身にも大凡は推量り奉ら
れて、これまた涙とゞめあへず。

身にかへて思ふとだにも知らせばや

たみのこゝろのをさめがたさを

の御製は、聖意いと畏く、恐多き極みの御
詠なり。

もの思はで過ぎぬる方の年月は

いかに寝し夜の夢にかあるらん

吉
野と懐舊の情を詠み給ひたる、吉野の行宮

神
にていかなるをりにか、

宮
あだに散る花をおもひの種として

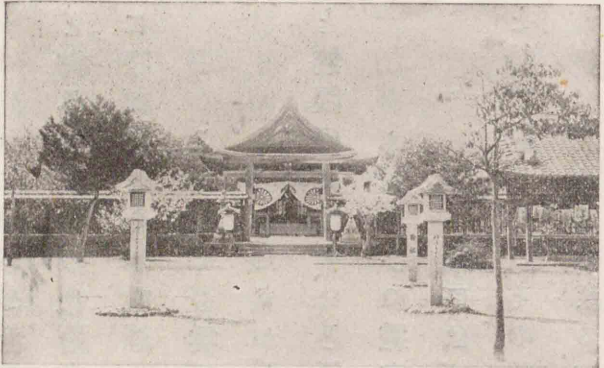
この世にとめぬこゝろなりけり

と感慨し給ひたる、同じ行宮にて御風邪

めしたる時、

つゆの身を草の枕におきながら

風にはよもと頼むはかなさ



屬從

と詠じ給ひたる、御扈從の人々うち續き身まかりける時、

こと問はん人さへ稀になりにけり

と御心細くものし給ひたる、吉野にて世尊寺の邊の雲居の櫻と名

に呼ばれたるが咲きたるを御覽じて、

ここにても雲居の櫻咲きにけり

たゞかりそめの宿とおもふに

と無限の御恨を、いと優しくいひ出で給ひたる、同じ行宮にて、

ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて

袖にはげしき山おろしのかぜ

と詠じ給ひたる、その他船上山にて名和長年に賜ひたる

忘れめやよるべも波のあら磯を

み船のうへにとめしこゝろは

(一)大和國(奈良縣)吉野郡大淀町比曾村

(二)伯耆國(鳥取縣)東伯郡赤崎の南三里
(三)姓は源氏。初伯耆國名和の人

の御詠の如き、なべて一天萬乗の御製とし思へば、臣子の分としては、涙なくては拜誦しまゐらせ難き御製多し。 — 調言 —

五 東洋の詩興

夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高ずると、心安い所へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれ、畫ができる。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人といふ天職ができ、ここに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

鏗鏘の音

靈臺

(Camera)

澆季溷濁の俗

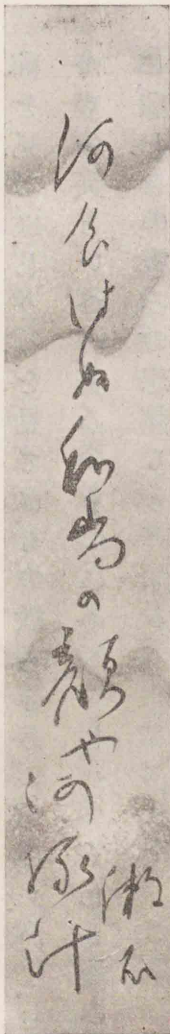
尺縑

住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有難い世界をまの
 あたりに寫すのが詩である。畫である。或は音樂、彫刻である。細かに
 いへば、寫さないでも、たゞまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌
 も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架
 に向かつて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞおの
 が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を
 清く麗かに収め得れば足りる。この故に無聲の詩人には一句なく、
 無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく
 煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我
 利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも
 幸福である。

忽ち足の下で雲雀の聲がしだした。谷を見下したが、どこで鳴い
 てゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせと

せはしく絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面にのみに刺さ
 れて、ゐたたまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の
 餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、また鳴きくら
 さなければ氣が濟まぬと見える。その上どこまでも登つて行く。い
 つまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り

何食はぬ和
 尙の顔やふ
 くと汁
 漱石



夏目漱石筆蹟

つめた擧句は、流れて雲に入つて漂うてゐるうちに、形は消えてな
 くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあること
 を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。たゞ
 菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の

(1) Percy
Bysshe
Shelley
イギリスの詩
人。西暦一七
九二年—一八
二二年

(2) 雲雀に寄する
賦。(Ode to
the Skylark.)

萬斛の愁

在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない。魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたものうちで、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。忽ちシェリーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちに覺えた所だけ誦誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しかなかつた。前を見ては、しりへを見ては、もの欲しとあこがるゝかな、われ。腹からの笑といへど、苦みのそこにあるべし。うつくしき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとぞ知る。なるほど、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひきつて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふわけには行かない。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて、胸が躍

陶冶
醇乎として醇

るばかりだ。かう山の中に來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものもおもしろい。おもしろいだけで、別段の苦みも起らぬ。苦みのないのは何故であらう。たゞこの景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面をもらつて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞこの腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を楽しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのであらう。自然の力はここに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりするのは、人の世につきものだ。余の欲する詩は、そんな世間的な人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、少時でも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した

小説は少からう。どこまでも世間を出ることのできぬのがその特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なものも、この境を解脱することを知らぬ。嬉しいことに、東洋の詩歌には、そこを解脱したものがあつた。

採菊東籬下。

悠然見南山。

たゞこれぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏。

彈琴復長嘯。

深林人不知。

明月來相照。

たゞ二十字の中に、優に別乾坤を建立してゐるのである。

—草枕—

〔唐の詩人王維の詩〕

別乾坤

六 李白

〔一〕今の甘肅省蘭山道隴西縣。

〔二〕今の四川省東川道重慶の西方。

〔三〕漢の文帝に仕へた武將。

〔四〕西涼の初世李嵩。

「いや、彼は隴西の産だ。」^(一)

「いや、彼は蜀の産だ。」

「とんでもないことで、巴西の産だよ。」^(二)

「冗談をいふな、山東の産を。」^(三)

「李廣の後裔だといふことだね。」^(四)

「涼武昭王嵩の末だよ。」

——青蓮居士謫仙人李太白の素性は、はつきりわかつてゐないらしい。

金持が死ぬと相續問題が起り、偉人が死ぬと素性争が起る。偉人や金持になることも、ちよつとどうも考へものらしい。

李白十歳の初秋であつた、縣令の下に小奴となつた。

或日牛を追つて堂前を通つた。

縣令の夫人が欄干により、四方の景色を眺めてゐた。

穢らしい子供が穢らしい牛を臆面もなく追つて行くのが、かの女の審美性を傷つけたらしい。

「無作法ではないか、外をお廻り。」

すると李白は聲に應じて賦した。

素面倚欄鉤。嬌聲出外頭。若非是織女。何必問牽牛。

これに驚いたのは夫人でなくて、その良人の縣令であつた。

早速引上げて小姓とした。さうして硯席に侍らした。

或夜すばらしい山火事があつた。

野火燒山後。人歸火不歸。

縣令は苦心してここまで作つたが、後を附けることができなかつた。

硯席

「おい、お前附けて見る。」

縣令は李白にかういつた。十歳の李白は聲に應じていつた、

燄隨紅日遠。烟逐暮雲飛。

縣令は苦々しい顔をした。それは自分よりもうまいからであつ

た。五歳にして六甲を誦し、八歳にして詩書に通じ百家を觀たとい

ふ麒麟兒であつた。田舎役人の縣知事などが、李白に敵ふべき道理

がなかつた。

或日美人の溺死したのがあつた。で縣令は苦吟した、

二八誰家女。飄來倚岸蘆。鳥窺眉上翠。魚弄口傍朱。

すると李白が後を繼いだ、

綠髮隨波散。紅顏逐浪無。何因逢伍相。應是想秋胡。

また縣令は厭な顔をした。で李白は危険を感じ、事を設けて仕を辭した。

(一)天文に關した書物。

麒麟兒

偶儻
任俠

(一)崑崙山脈に屬し甘肅陝西四川の境界を南東に走つてある。
(二)Saint Francis of Assisi. イタリーの説教家。フランシスコ派の始祖。(西暦一一二六年)

詩的詩的小人といふものは、俗物よりも嫉妬深いもので、それが高ずると、えらいことをする。李白の逃げたのは利口であつた。

劍劍を好み諸侯を干して奇書を読み、賦賦を作る。——十五歳までの彼の生活は、まづざつとこんなものであつた。

年二十、性偶儻、縦横の術を喜び、任俠を事とす。——これがその時代の彼であつた。

財を輕んじ施を重んじ、産業を事とせず豪嘯す。——こんなやうにも記されてある。

(二)或日喧嘩をして數人を斬つた。土地にあることができなかつた。

この頃東巖子といふ仙人が岷山(一)の南に隱棲してゐた。で李白はそこへ走つた。

聖フランシスは野禽を相手に説教をしたといふことであるが、

東巖子も小鳥に説教した。彼は道教の道士であつた。

彼が山中を彷徨つてゐると、數百の小鳥が集つて來た。頭に止り、肩に止り、手に止り、指先に止つた。さうして盛に啼きたてた。それへ説教するのであつた。

李白はそこへかくまはれることになつた。

或日李白が不思議さうにきいた、

「小鳥に説教がわかりませうか。」

「ばかなことをいふな、わかるものか。あんなにむやみと啼きたてられては、第一聲が通りやしない。」

「なぜ集つてくるのでせう。」

「おれが毎日餌をやるからさ。小鳥にもてるのもいいけれど、糞を掛けられるのは閉口だ。」

一度彼が外出すると、彼の道服は鳥の糞で穢らしい飛白を織る

のであつた。

「一體道教の目的はどこにあるのでございませう。」

或時李白がかうきいた。

「つまり、なんだ、幸福さ。」

「幸福を得る方法は。」

「長命することと金を溜めることさ。」

洵にあつさりした答であつた。

「どうしたら金が溜りませう。」

「働いて溜めるよりし方がない。」

「その癖、先生はお見受けしたところ、ちつとも働かないぢやありませんか。」

「うん、どうやらそんな恰好だな。」

「働かないで溜める方法は。」

「よくこの次までに考へて置かう。」

一向張合のない挨拶であつた。

「どうしたら長命がございませう。」

「いろいろ方法があるらしい。」

「それをお教へ下さいませんか。」

「おれにはわかつてゐないのだよ。」

「物の本で読みましたところ、内丹説、外丹説いろいろあるやうで

ございますね。抱朴子(一)などを讀みますと。」

「ほ、う、それではお前の方が學者だ。ひとつおれに話してくれ。」

李白これには閉口してしまつた。

或日東巖子が李白にいつた、

「天とは一體どんなものだらう。」

「は、あ、これはおれをためす氣だな。」

金丹、外丹、抱朴子、(一)晋の葛洪(號抱朴子)の撰。

すぐに李白はかう思つた。

「道教の方で申しますと、天は百神の君ださうで、上帝、昊天、皇天などとも、皇天上帝、昊天上帝、維皇上帝、天帝などとも名づけるさうでございしますが、意味は同じだと存じます。天は唯一絶體ですが、その功用は水火木金土、その氣候は春夏秋冬、日月星辰を引連れて、風師雨師を支配するものと、私はこんなやうに承つて居ります。」

「ふうん、大變むづかしいんだな。おれにはそんなやうには思はれないよ。色が蒼くて眞圓で、その端が地の上へ垂れさがつてゐる。こんなやうにしか思はれないがな。」

これには李白もぎやふんとまゐつた。

「地に就いてはどう思ふな。」

これはあぶないと思ひながらも、眞面目に答へざるを得なかつ

た。

「地は萬物の母であつて、人畜魚蟲山川草木これに生まれこれに死し、王者の最も尊敬するもの、冬至の日を以て方澤に祭ると、かう書物で讀みました。」

「お前のいふことはむづかしいなあ。おれにはそんなやうには見えないよ。變な色の、變にでこぼこした、穢らしいものにしか見えないがね。」

これにも李白は一言もなかつた。

「お前は人の性をどう思ふね。」

「はい、孔子による時は、『人之生也直。罔之生也。幸而免。』^(一)かうあつたやうに思はれます。しかし、孟子は性善を唱へ、荀子は性惡を唱へました。だが、告子は性可能説を唱へ、また楊雄、韓愈等は混合説を唱へましたさうで。」

(一)字は況。周代趙の人。孟子と同時代。孟子の學孔子を尊んだ。
(二)名は不害。孟子の門人。
(三)字は子雲。漢の學者。詩文家。蜀の成都の人。
(四)字は退之。唐の文豪。唐宋八家の一。

「だが、そいつは他人の説で、お前の説ではないぢやないか。」
「あつ、さやうでございましたね。」
「で、お前はどう思ふのだ。」
「さあ、私にはわかりません。」
「わかるやうに考へるがいい。」
「あの、先生にはどう思はれますので。」
「おれか。おれはな、そんなつまらないことは、考へない方がいいと思ふのさ。形而上學的思辯といつて、浮世を小うるさくするものだからな。」
これには李白は何となく教へられたやうな氣持がした。
「まづいものばかり食つてゐると、肉放れがして瘦せてしまふ。うまいものを食へ、うまいものを。」
かう口ではいひながら、稗だの、粟だの、黍だのを東巖子は平氣で

食ふのであつた。

「綺麗な衣裳を着るがいい。さうでないと他人にばかにされる。」
かういひながら東巖子は、一年を通してたつた一枚の道服を着通すのであつた。

「出世をしるよ、出世をしるよ、いい主人を見つけてな。」

かういひながら東巖子は、山から出ようとはしないのであつた。彼は言行不一致であつた。それが却つてえらかつた。彼は盛に逆理を用ひた。

李白は次第に感化された。個儻不羈の精神が、輕快洒脫の精神に變つた。

或日突然東巖子がいつた、

「お前は山川をどう思ふな。」

「山は土の盛上つたもの。川は水の流れるもの。私にはこんなやう

洒脫

に思はれます。
「さあさあ、お前は卒業した。山を出て世の中へ行くがいい。」
——で翌日岷山を出た。——
——大衆文藝國枝史郎の文による——

七 新島守 その一

四月二十日帝(一)おひらせ給ひ、春宮四つ(二)にならせ給ふに譲り申させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中の院と申し、父帝をば本院とぞ聞えさする。このほどは家實(三)の大臣關白にておはしつれど、御讓位の時道家の大臣攝政になり給ふ。かの東の若君の御父なり。
さて(四)も院の思し構ふること、忍ぶとすれどやうやう漏れきこえて、ひがし(五)ごまにもその心遣すべかめり。東の代官にて伊賀の判官

(一)承久三年(一八八一年)
(二)順德天皇
(三)仲恭天皇
受禪
(四)土御門院
(五)後鳥羽院
(六)近衛基通の子
(七)後京極良經の子
(八)當時の將軍頼經。鎌倉にゐた。
(九)後鳥羽院
(一〇)鎌倉幕府方
(一一)佐藤朝光の子。承久三年歿。

かつがつ
御勘事

(一)北條義時

たなびかす



光季といふものあり。かつがつ彼を御勘事の由仰せらるれば、身方に參るつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。

後東にもいみじうあわてさわぐ。さ鳥るべくて身の失すべき時にこそあ羽なれと思ふものから、討手の攻來り天なん時に、はかなきさまにて屍を暴皇さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつは我が身の宿世をも見るばかりと思ひなり

弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて、都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、おのれをこのた

横ざまの死

び都に参らすることは、思ふところ多し。本意の如く清き死をすべし。人にうしろ見えなんには、親の顔また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死をせんことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、二たびこの足柄、箱根山は越ゆべし。など泣く泣くひきかすまことにしかなり、また親の顔拜まんこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今や限りと哀に心細げなり。

かくてうち出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時たゞ一人鞭をあげて馳來たり。父胸うち騒ぎて、いかにと問ふに、軍のあるべきやう、大方の掟などは、仰の如くその心を得はべりぬ。若し道のほとりにも、はからざるに忝く鳳輦を先立てて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることもはべらんに参りあへらば、その時の進退いかが

とばかり

かしこまりを申す

はべるべからん。この一ことを尋ね申さんとて、一人馳歸りはべりき。といふ。義時とばかりうち案じて、賢くも問へるをのこかな。その事なり。正に君の御輿に向かひて弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は、胃を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましたながら、軍兵を賜はせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし。といひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつることなれば、ものふども召集へ、宇治、勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の(一)大將一人のみなん、御うまごのこともさることにて、北の方(二)一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は、故大將のはらからなれば、一方ならず東を重く思ひて、さしいらへもせず、院の御心の輕きこととあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言

(一)藤原氏。西園寺家の祖。
(二)將軍賴經の公經の女の出である。
(三)藤原通重の子。建久九年(一一八五年)薨年五十一。
(四)賴朝をいふ。
(五)藤原殖子。後鳥羽院の御母。

(一)藤原重子。順德院の御母。文永元年(九二四年)薨。御年八十八。上達部

すべる

龍馬

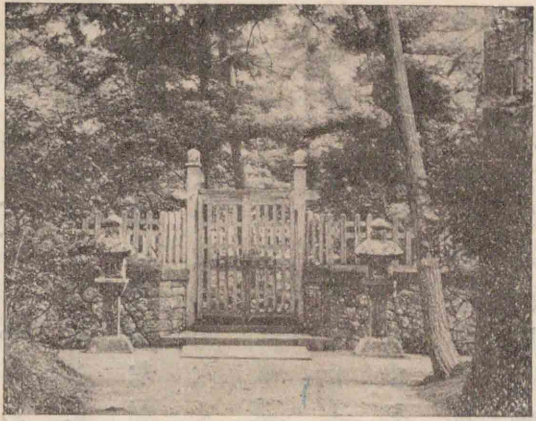
忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎつぎ數多聞ゆれど、さのみは記し難し。いくさにもまじり立つ人々、この外の上達部にも殿上人にも數多ありき。
中の院はあかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊にまじらひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍のことなども、おきて仰せられたり。
いつの年よりも五月雨時間なくて、富士川、天龍などえもいはず漲り騒ぎて、いかなる龍馬もうち渡し難ければ、攻上る武者どもも、怪しく惱めり。かゝれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ち遣す。世の中響き罵るさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へにげ籠り、

けふを限りの御ありき (一)とりかへすものの中がなや世の中がなありしなから私の我が身と思はん(源氏物語河海抄)

遠き世界に落下り、すべて安げなく騒ぎ満ちたり。いかがあらんと君も御心亂れて、思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞしく色を失ひたるさまども、たものしげなし。六月十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、遂に身方の軍破れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下たゞものにぞ當り惑ふ。
八 新島守 その二
東よりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍謀らひおきてつづ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮宮、ところどころに思し惑ふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ綱代車の怪しげなるにて、七月六日いらせ給ふ。けふを限りの御ありき、あさましう哀なり。ものにもがな

(一)藤原信實
名な畫家。
永二年(一
二五年)歿。
七十九年

(二)秦の第三世子
嬰のこと。始
皇の孫。在位
四十六日。沛
公に降り秦は
滅びた。



(佐渡國眞野陵) 順德天皇陵

や。と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に
一つ二つや餘らせ給ふらん、まだいと惜しかるべき御ほどなり。信
實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七
條の院へ奉らせ給はんとなり。かくて
同じき十三日に御舟に奉りて、遙かな
る波路を凌ぎおはします御心地、この
世の同じ御身とも思されず。いみじう
いかなりける代々の報にかと恨めし
新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや
七月九日帝をもおろし奉りき。この四
月かとい、御讓位とてめでたかりしに、
夢のやうなり。七十餘日にており給へる例も、これや始なるらん。唐
土にぞ四十五日とかや位におはする例ありける。とぞ、唐の文讀み

し人のいひし心地する。それもかやうの亂やありけん。さて上達部
殿上人、それより下はた残りなくこのことに觸れにしたぐひは、重
く軽く罪に當るさま、いみじげなり。

中の院は初より知ろしめさぬことなれば、東にも咎め申さねど、
父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にあらんこと、いと恐
ありと思されて御心もてその年閏十月十日、土佐國の幡多(一)といふ
所にわたらせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや、若宮いでき給へ
り。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひし
人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家
に留め奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下薦一人、召次などば
かりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿にて下らせ給ふ。
道すがら雪かきくらし、風吹きあれ、吹雪して、來し方行く先も見え
ず、いと堪難きに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

御心もて
(一)土佐國(高知
縣)の西南幡
多郡。
(二)後嵯峨天皇。
(三)土御門天皇の
御母在子。
せうと
(四)源通子。

わりなきこと

(一)同年閏十月

うたて

よせ
きざみ
むげの民
(二)藤原純友。朱
雀天皇の天慶
四年(一六〇
一年)誅せら
れた。
(三)源義親。義家
の第二子。鳥
羽天皇の天仁
元年(一七六
八年)誅せら
れた。

憂世にはかゝれとてこそうまれけめ

ことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近きほどに」と東より奏したりければ後には阿波國に遷らせ給ひにき。

さてもこのたび世の有様げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは父の王を失ふ例だに一萬八千人までありけり。ところ佛も説き給ひためれまして世下りて後、唐土にも日の本にも國を争ひて戦をなすこと數へつくすべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけん。若しはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、少しのたがひめに世に隔りて、その恨の末などより事起るなりけり。今のやうにむげの民と争ひて君の滅び給へる例、この國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇

(一)後白河法皇。

御裳濯川の流

おほけなく
(二)一條天皇。

あやなき業

(三)後鳥羽院。

百の官

徳院の世を亂り給ひしだに、故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照大御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の帝を守り給はすることは強きなめり。とぞ、古き人々も聞えし。また信賴の衛門督おほけなく、^(一)一條院を脅し奉りしも、遂に空しき屍をぞ道の邊に棄てられける。かゝれば舊りにしことを思ふにも、なほさりともしいかでか上皇、今上數多在します王城の、徒に亡ぶるやうやはあらんと、たのもしくこそ覺えしに、かくいとあやなき業の出できぬるは、この世一つのことにもあらざらめども、迷の愚かなるまへには、^(二)なほいと怪しかりし。

^(三)六つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じことなりしかば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を従へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡

津の國のこ
やとも人をい
ふべきに、隙
こそなけれ
の八重ぶき
（後拾遺集、和
泉式部）
霞の洞

かすよりもまされる御有様にて、遠きを憐み近きを撫で給ふ御惠、
雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞し召すに
も、難波の葦の亂れざらんことを思しき。藐姑射の山の峰の松もや
うやう枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ幾春を
経ても、空行く月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりけ
る世を、ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別
れ、己がちりぢりにさすらへ、磯の苦屋に軒を並べて、自らこと問ふ
ものとは、浦に釣するおま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、我が故郷
のしるべかとはばかり詠め過させ給ふ御すまひどもは、それまでと
月日を限りたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと心細
かるべし。まいていつをはてとか廻りあふべき限りだになく、雲の
浪、煙の浪の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御さまども、
口惜しといふもおろかなり。

けしきばかり
事そぎたり
柴の庵のしば
し
（一）「いづくにも
すまれずばた
だすまらずあら
ん、柴の庵の
しばしなる世
に。」（新古今
集、西行法師）
ゆるづく
（二）和漢朗詠集白
樂天の詩句、
月色、三夜中、新
外故人心、
こちたし

このおはします所は、人離れ里遠き島の中なり。海面よりは少し
引入りて、山蔭に片そへて、大きやかなる巖のそばだてるをたより
にて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり事そぎたり。誠に柴の
庵のたゞしばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方に
なまめかしく、ゆるづきてしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも
夢のやうになん。遙々と見やらるゝ海の眺望、^(二)二千里の外も残りな
き心地する、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるを聞し召
して、

われこそは新島守よおきの海の

あらし波かぜこゝろして吹け

おなじ世にまたすみの江の月や見ん

けふこそよそに沖のしまもり

— 増鏡 —

九 東下り

(一)碧海郡。知立町の東。

かれひ

昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあらず、東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とはいひける。その澤の邊の木の蔭におりて、餉かたくひけり。その澤に燕子花いとおもしろく咲きたり。それを見て或人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め、といひければ、詠める、

唐衣きつ、馴れにしつましあれば
 はるばる來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、餉の上に涙落してほとびにけり。行き行きて

(一)安倍郡と志太郡との境。



東 駿河國に至りぬ。宇津の山に至りて、我が入らんとする道は、いと暗う細きに、蔦かづらは茂り、もの心細く、すゞるなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。かゝる道にはいかでかおはする。といふに見れば、見し人なりけり。京にその人の御許にて、文書きてつく。

駿河なるうつの
 山邊のうつゝにも
 ゆめにも人に
 逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りたり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪の降るらん

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは鹽尻のやうになんありける。なほ行き行きて、武藏國と下總國とのなかに、いと大きな河あり、それを角田河といふ。その河の邊に群れゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ。日も暮れなん。といふに、乘りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鳴の大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人え知らず。渡守に問ひければ、これなん都鳥。といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はん都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

と詠みければ、舟こぞりて泣きにけり。

—伊勢物語—

一〇 富嶽の詩神を懷ふ 北村透谷

空を望んで駿驅する日陽虚に循つて警立する候節、天地の運流いつを以て極みとはするならん。

且に平氏あり、夕べに源氏あり、飄忽として去り、飄忽として來る。一潮山を噬んで一世紀没し、一潮退き盡きて他世紀來る。歴史の載するところ一潮毎に葉數を減じ、古苔むしつくして英雄の遺魄日に寒し。嗚呼、人生の短期なる、きのふの紅顔けふの白頭、忙々促々として眼前の事に營々たるもの、悠々緜々として千載の事を慮るもの、同じくこれ大暮の同寐、霜は香菊を厭はず、風は幽蘭を容さず。忽ち逝き忽ち消え、邈冥として踪ぬべからざるを致す。

虚に循つて警立す

飄忽

遺魄

大暮の同寐

邈冥

叱咤す

俗眼者流

再々

墳墓何の權かある。宇内を睥睨し、日月を叱咤せし英雄何すれぞ
 墳墓の前に弱鬼の如くなる。誰か不朽といふ字を字書の中に置き
 て、而して世の俗眼者流をして縦に流用せしめたる。嗚呼、墳墓汝の
 冷々たる舌、汝の常に餓ゑたる口、何者をか噬まざらん、何物をか吞
 まざらん、而して墳墓よ、汝もまた遂に空々漠々たり。水流滔々とし
 て洋海に趣けども、洋海は終に溢れて大地を包まず、再々として行
 暮する人世、終に新なるを知らず、また故なるを知らず。

朽ちざるものいづくにかある。死せざるものいづくにかある。わ
 れ答を待ちて躊躇せり。而して答終に來らず。朽ちざるに近きもの
 いづくにかある。死せざるに近きものいづくにかある。われこの答
 を聽かんが爲に、過去の半生を逍遙黙思に費せり。而して終にその
 一部を聽けりと思ふは非か、非ならざるか。

天地のわかれし時、神寂びて、高く貴き駿河なる富士の高



筆三會塚石

嶺を、天の原振りさけ見れば、渡る日の影も隠るひ、照る月の光も見えず、白雲もいゆき憚り、時じくぞ雪は降りける。語り

継ぎいひ継ぎ行かん富士の高嶺は。(山部赤人)

白雲、黒雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、これ等のものを用役し、これ等のものを使僕し、これ等のものを制御して、而して恒久不變の威靈を保つもの、富嶽よそれ汝か。渡る日の影も隠るひ、照る月の光も見えず、晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す。富嶽よ、汝こそ不朽不死に邇きものか。汝が山上の浮雲より早く消え、汝が山腹の電影よりも速かに滅する浮世の英雄何の戯ぞ。勇ましや汝の山麓を西に馳する風。快しや汝の山嶺を東に飛ぶ風。流轉の風汝に迫らず、無常の權汝を襲はず。自由汝と共にあり。國家汝と共に樹てり。何をか畏とせん。遠く望めば美人の如し。近く眺むれば威嚴ある男子なり。アルプス山の大歐文學に於ける、我が富嶽の大和民族の文學に於ける、淵

源するところ、關聯するところ、豈寡しとせんや。遠く望んで美人の如く、近く眺めて男子の如きは、そも我が文學史の證するところの姿にあらずや。アルプスの崇巖或はこれを缺かん。然れども富嶽の優美何ぞ大いに譲るところあらん。我はこの觀念を以て我が文學を愛す。富嶽を以て女性の山とせば、我が文學も恐らく女性文學なるべし。雪の衣を被ぎ、白雪の頭巾を冠りたる恒久の佳人、我はその玉容を樂しむ。

飄遊す

盡きず朽ちざる詩神、風に乗り雲に御して東西を飄遊し給へり。富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天涯よりその山巔に急げり。而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐り棲みて、遂にまた去らず。これより風流の道大いに開け、人麿、赤人より降つて、西行、芭蕉の徒、この詩神と逍遙せんが爲に、富嶽の周邊を往返して、形なく像なき記念碑を空中に構設し始めたり。詩神去ら

—透谷全集—

ず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味はひあり。

一一 羽衣 謠曲

ワキ(一)「聲、風早の、三穗の浦曲をこぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。
 サシ「これは三保の松原に、白龍と、まをす漁夫にて候。ツレ(二)萬里の高山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨始めて晴れたり。げに長閑なる時しもや、春のけしき松原の、浪たち續く朝霞、月ものこりの天の原、およびなき身の眺にも、心空なる景色かな。歌(三)忘れめや、山路をわけて清見瀉、遙かに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風(四)むかふ、雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝風に、釣人多き小舟かな。ワキ詞、われ三保の松原にあがり、浦の景色を詠

シテ 天人
ツレ 漁夫
(一)三保とも書く、駿河國(靜岡縣)清水港の南に突出して、早の松原、浦曲をこぐ舟の浦人さわぐ浪路かな。
(二)萬里集卷七、作者不詳。
(三)千里好山雲乍斂。一樓明月雨初晴。樓明見える。
(四)「忘れずよ清見が關の波間より霞みて見えし三保の浦松。」(續古今集、中務卿)
(五)「風むかふ雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。」(藤原爲相)

虚空

むるところに、虚空に花ふり、音楽聞え、靈香四方に薰ず。これたゞご
と思はぬところに、これなる松に、美しき衣懸れり。よりに見れば、
色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見
せ、家の寶となさばやと存候。

シテ詞、なう、その衣は此方にて候。何しに召され候ふぞ。ワキ詞、こ
れは拾ひたる衣にて候ふほどに、取りて歸り候ふよ。シテ、それは天
人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものに非ず。元の如くに置
き給へ。ワキ、そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。
さもあらば、末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返
すことあるまじ。シテ、悲しやな、羽衣なくては飛行の途も絶え、天上
に還らんこともかなふまじ。さりとは返したび給へ。ワキ、この御
詞を聞くよりも、愈、白龍力を得、もとよりこの身は心なき、天の羽衣
取隠し、かなふまじとて立ちのけば、シテ、今はさながら天人も、羽な

とやあらんか
くやあらんか

(一)は頭上天花
忽姿。二は天
衣塵垢所著。
三は腋下汗出。
四は両目數胸。
五は不樂本
居。

き鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ、地にまた住めば下
界なり。シテ、とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ、白龍衣を返
さねば、シテ、力及ばず、ワキ、せんかたも、地、涙の露の玉かづら、かざ
しの花もしをしをと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。
シテ、天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路惑ひて行方知らずも。歌
地、住馴れし、空にいつしか行く雲の、羨ましき景色かな。迦陵頻伽の
なれなれし、聲今更に僅かなる、雁が音の歸り行く、天路をきけば懐
かしや。千鳥、鷗の冲つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまで懐かし
や。

ワキ詞、いかに申候。御姿を見奉れば、餘りに御いたはしく候ふほど
に、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞、あら嬉しや、此方へ賜はり候
へ。ワキ、暫く承り及びたる天人の舞樂たゞ今ここにて奏し給はば、
衣を返し申すべし。シテ、嬉しや、さては天上に還らんことを得たり。

疑は人間にあり

霓裳羽衣の曲

このよろこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今ここにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ「いや、この衣を返しなば舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ、いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。ワキ、あら耻づかしや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ、少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ、天の羽衣風に和し、シテ、雨にうるほふ花の袖、ワキ、一曲を奏で、シテ、舞ふとかや。地、東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

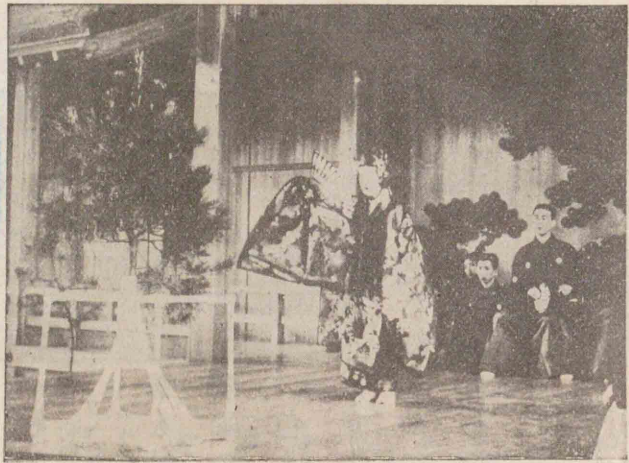
玉斧の修理

地、それ久方の天といつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久方の空とは名附けたり。シテ、サシ「然るに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地、白衣、黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役

(一)「春霞たなびきの、月にけり久方の、花や咲くらん。」(後撰集、紀貫之)

(二)「天つ風雲の、通路吹きとちよ、なとめの姿し、ばしとどめん。」(古今集、良岑宗貞)

(三)「君が代は天の、羽衣まれにきて、撫づとも盡きの巖なるらん。」(拾遺集、よみ人しらす)



をなす。シテ、我も數ある天少女、地、月のかつらの身をわけて、かり

に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ、春霞たなびきにけり久方の、羽月の桂も花や咲くげに、花かづら色めくは、春のしるしかや。おもしろや天ならで、ここも妙なり。天つ風雲の通路吹きとちよ。少女の姿し、ばしとどまりて、この松原の春の色を三保がさき、月清見瀉、富士の雪、いづれや春の曙、たぐひ浪も松風も、長閑なる浦のありさま。その上、天地は何を隔

てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ、君が代は、天の羽衣稀にきて、地、撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり。東

(一)「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日。」
 江定基の詩
 (二)「北は黄に南は青く、東白、西くれば、ぬにそめいるの山。」
 (紫式部) 本地

(三)愛鷹山。

歌聲そへてかずかずの、笙^{しやう}笛^{てつ}琴^{きん}、くご、孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪を廻らす、白雲の袖ぞ妙なる。^{シテ}南無歸命月天子、本地大勢至。地、東遊の舞の曲、^{シテ}ワキ、あるひは天つみ空の緑の衣、^地または春立つ霞の衣、^{シテ}色香も妙なり少女の裳、^地左右左、さいう颯々の花をかざしの天の羽袖、なびくもかへすも舞の袖。舞、東遊のかずかず、に、その名も月の色人は、三五夜中の空にまた、満願眞如の影となり、御願圓滿國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のあしたか山や、富士の高嶺、微かになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。

羽衣の傳説 「自修文」



春 霞 (山西 翠嶂 筆)

駿州の三保の松原、空も水も一つ色に澄みわたつて、遙かに見やる富士の高嶺の雪、近くは寄返る荒磯の波と、天地を青と白とに染分けて居る。いづくよりともなく、一片の白雲のやうにひらりとここに下り立つたものがある。照る日に輝く薄衣を松が枝に掛けて、清い汀に浴したのは天つ少女である。白龍といふこのわたりの漁夫、この薄衣を松の上に見つけて携へて歸らうとする。それを取られては再び天に上ることかなはず、是非返し給へと歎けば、天人の舞樂を奏し給はば返し申すべしと、ここに奏づる霓裳羽衣の曲。天つ少女は羽衣を得て天上へ歸つて行くといふのが、謠曲「羽衣」の概要である。謠曲の文には佛語が加つて居て、その文を見ると、御寺の欄間などに彫つて

(一)元明天皇の御代諸國に命じて上進せしめられた地方誌。

ある天女を聯想するが、これは我が太古から傳はつた神話である。しかもそれが方々にあつたのである。

古い風土記の今日に残つて居る文から見ると、近江國と丹後國と同じやうな話がある。近江國伊香郡與胡郷伊香小江に、八人の天つ少女が白い鳥となつて、天から下つて江の南の津に浴した。伊香刀美といふ男、こは神に相違なからうと狙つてゐたが、竊に白犬をやつて一人の天女の羽衣を盗ませた。天女はその爲に天上に歸ることができず、伊香刀美の妻となり、男女各二人の子を産んだ。

(二)今の中郡。

もう一つは丹後國丹波郡三家西北の隅の方に、比治里といふ所がある。この比治山の頂に眞井といふ井があつたが、或時天女七人ここに來て浴した。わなさ老夫、わなさ老婆といふ老人夫婦がこれを見て、その一人の羽衣を取隠した。その天女はやむなく老夫婦の子となつて、十年ほど住んだが、その間に天女はよい酒を醸し、一杯飲めば萬病立ちどころに癒るといふので、老夫婦は忽ちに富み榮えた。然るに恩知らずの老夫婦はその後この天女を追出したので、天女

は天に歸ることもできず、諸所を流浪したといふ話である。白鳥の下つた話はなほ常陸風土記にも見えて居て、その話に多少の相違はあるが、とにかくよほどひろく傳播した話らしく見える。謠曲の「羽衣」は、畢竟この美しい古傳説を基礎として作つたものである。

(1) Swan.

(2) Swan Maiden.

(3) Michailo Ivanovich.

ところがおもしろいことには、これは決して日本固有のものではなく、世界中に弘く擴つて居る話である。西洋では白鳥即ちスワンが最も美しい上品な鳥と考へられて居るが、天女がこの白鳥となつて浴して居る中、その羽を取られて歸れなくなるといふ同じ筋の話が澤山ある。よつて傳説學者はこれをスワン・メイドン式の傳説と名づけて居る。所々國々によつて少しづつ違ふが、大體の筋は變らぬのである。スエーデンでは若い獵師が三つの白鳥が羽を棄てて水中に浴するのを見付けた。その中の一つの羽衣を隠して置くと、他と一緒に歸れぬので、遂にその獵師の妻となつたといふ。ロシヤのミハイロ・イワノウィッチといふ男は、海邊を逍遙して、水中に浴して居る一羽の白鳥を見た。矢を以て射取らうとすると、やがて美しい女となつて現れた。白鳥ばかりでなく、外

[Finland] (芬蘭)

の鳥の話になつて居るのもある。極北に近いフィンランドの話では、死んだ父親が三人の息子の夢枕に立つて、夜海邊へ行つて雁を見よと告げる。二人は闇を恐れて行かなかつたが、末の子は夜中張番はりばんをして居る。明方に三羽の雁が来て、皆その羽を脱いで、美しい少女となつて海水に浴した。その中の最も美しい一人の羽衣を隠して渡さぬので、少女はその男の妻となつた。雁ではなくて家鴨と傳へられて居る所もあるが、また或地方では鳩になつて居るものもある。

[Guiana]

地つゞきのアジャ、ヨーロッパばかりでなく、南アメリカのギヤナにも同じ話がある。

[Aravak]

アラワックスといふ土人の話に、或時一人の獵師が美しい鳥をつかまへた。これは天上に國を有する王様アヌアニマの娘で、やがて人間の形になつて、その獵師と結婚したといふ。

[Ananima]

エスキモーではその鳥が海鳥になつて居る。

[Esquiman]

またポメラニヤの話に次のやうなのがある。獵夫が森の中をたどつて沼の脇へ

(Pskimo)

出ると、一人の少女が沐浴して居るのを見た。多分近所の村からでも來たものと考へて、いたづらにその着物を隠した。少女は水から上つて、是非返してくれといふのを拒絶して、遂にその少女を妻とした。その着物は錠をおろして簞

[Pomerania]

笥の中へ入れて置いたが、夫の不在中、妻はその姑に向かつて、是非その着物を見せてくれといふ。姑がそれを出して見せると、忽ちそれを持つて見えなくなつてしまつた。夫は歸宅して妻の行方を尋ねると、これからいろいろな冒險譚になるのである。或地方になると、鳥ではなくて獸になつて居るものもある。海豹あひらしが毛皮を脱いで浴して居る話もある。

白鳥が雁や、鳩や、いろいろな鳥になり、はては獸にまで變つて居るが、その道筋は全く同じである。これはその國の風土、動植物の差から起つてくるのである。謠曲の「羽衣」には鳥のことはないが、前に擧げた近江、丹後、常陸などの風土記の話も、皆白い鳥である。天から少女が下つたといふ話には、天武天皇が吉野の瀧の宮にお出でになつて、たゞ一人琴を弾じていらせられると、雲の中で少女が袖を振つて踊つたのを御覽ぜられたことがある。これがそもそ

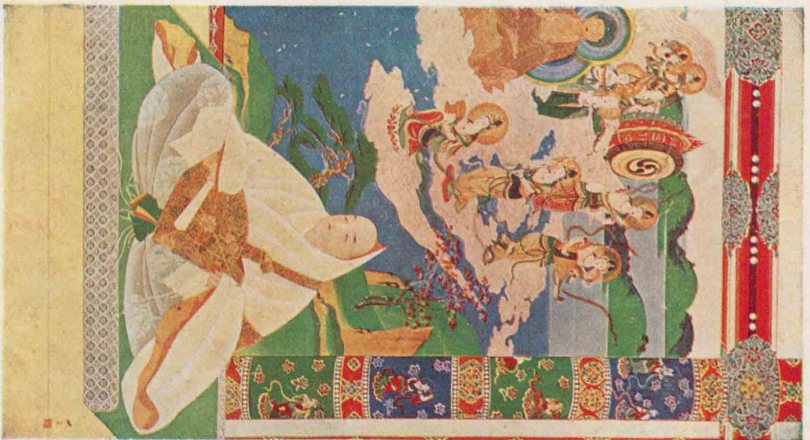
も五節(一)こせちの舞といふものの始めであるが、つまりは同じ種類の話である。かういふ世界一般に擴つた話が太古からあるといふことは、おもしろいことではないか。

(一)昔十一月中の丑うしの日から新嘗祭にいなめの次の日の豊明節とよあかりのふし會行くわいぎやうにわたつた女おんなは腕うでに擬なした五人ごにんの舞まいが袖そでをひる女おんながへして舞まいふ。

一二 御堂關白

(一)花山法皇。第六十五代花山天皇讓位後花山院に入御。さうざうし
 むづかしけ
 けしき覺ゆ
 (二)藤原道長。
 さる所おはし
 ます
 (三)藤原道隆。道
 長の長兄。
 (四)藤原道兼。道
 長の仲兄。
 便なきこと

(一)花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしく搔亂れ雨のふる夜、帝さうざうしくや思し召しけん、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましてけるに、人々御物語申しなとし給ひて、昔恐しかりけることどもなどに申しなり給へるに、今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、けしき覺ゆ。ましてもの離れたる所などいかならん。さあらん所に一人いなんや。と仰せられけるに、え罷らじ。とのみ申し給ひけるを、入道殿は、いづくなりとも罷りなん。と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、いと興あることなり。さらば行け。道隆は豊樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ行け。と仰せられければ、よその君たちは、便なきことをも奏してけるかなと思ふ。また承らせ給へる殿原



御堂關白 松岡映丘筆

にがむにがむ

子四つ

(一)道隆。

すちなし
(二)道兼。

は御氣色變りて、益なしと思したるに、入道殿は露さる御氣色もな
くて、私の従者をば具し候はじ。この陣の吉上まれ、瀧口まれ、一人昭
慶門まで送れと仰言たへ。それより内には、一人入りはべらん。と申
し給へば、證なきこと。と仰せらるゝに、げに。とて、御手箱におかせ給
へる刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむにがむ、各おはしましぬ。
子四つと奏して、かく仰せられ議するほどに、丑にもなりにけん、
「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ。」と、それを
さへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念
じておはしたるに、宴の松原のほどに、そのものともなき聲ども
聞ゆるに、すちなく、歸り給ふ。栗田殿は露臺の外まで、わななくわ
ななくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、簷とひとしき人
のあるやうに見え給ひければ、ものも覺えで、身の候はばこそ仰言
も承らめ。とて、各立歸り參り給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふ

に、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかがと思し召すほどにぞ、いとさりげなくことにもあらずげにて、参らせ給へる。いかにいかに。」と問はせ給へば、いとどかに、御刀に削られたるものを取具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ。」と仰せらるれば、だゞにて歸り参りてはべらんは、證さぶらふまじきによりて、高御座の南表の柱のものを削りて候ふなり。」とつれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色はいかにも直らで、この殿のかくて参り給へるを、帝より始め感じの、しられ給へど、羨ましきにや、またいかなるにか、ものもいはでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つとめて藏人して、削屑を遣して見よ。」と仰言ありければ、もて行きて、おしつけて見たうびけるに、露違はぎりけり。その削跡はいとけざやかにてはべるめり。末の世にも見る人は、なほあさましきことにぞ申ししかし。

大鏡一

時代物
世話物

(一) 明末の人。鄭芝龍（永曆五年、西曆一六六一）とその子鄭成功（康熙元年、西曆一六六二年歿）
(二) 明朝の將軍。後、韃靼に内應し、明帝を弑した。
(三) 明朝の忠臣。司馬大將軍。西曆一六七八年歿。
(四) 明の熹宗の年號（西曆一六二五年）
(五) 錦祥女。甘輝の妻。
(六) 明の將軍。初め韃靼に降り、後、鄭芝龍に應じた。

一三 千里が竹

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あとに應護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地にも着きにけり。鄭芝龍一官は、故郷に歸る唐錦裝束引きかへ妻子に向かひ、「我が本國といひながら、時移り代變り、天下悉く李踏天が引入れに、韃靼夷の奴となり、昔の朋友、一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が、生死の様子も知れざれば、何を以て義兵の旗を揚げ、何處を一城にたて籠るべき所もなし。然るに、某去る天啓五年、この國を立退き日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を、乳母の袖にすて置きしが、その子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は、八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今、吳將軍甘輝と

(一)鄭成功。國姓爺といふ。

(二)支那湖北省武昌府嘉魚縣。
(三)宋の詩人蘇東坡。

たづきも知らぬ

いふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便に聞及ぶ。頼む方はこればかり、親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、婿の甘輝もやすやすと頼まるべし。これより道のほど百八十里、うち連れては人も怪しまん。我一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、追ひつくべし。これよりさきは音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば、潯陽の江、これ猩々の栖む所。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へはほどもなし。その赤壁にて待ちそるへ、萬事をしめし合はすべし。と、方角とても白雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひがひしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、とび越え跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる、千里が竹

ほうと我をぬかし

讀めたり讀めたり

(一)「虎嘯而谷風至。龍舉而景雲屬。」(淮南子)
(二)晋の人。十四歳の時赤手で虎を搏して父の厄を救つた。

に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、なう母ぢや人。この脛骨に覺えたり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行けば行くほど藪の中。むう、わかつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。と、根笹、大竹押分け踏分け、なほ奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭、ちやるめら高音をそらし、ひやうひやうとこそ聞えけれ。すは我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、または狐のなす業か。と、茫然たるそのをりふし、空凄じく風起り、砂を穿ちどうどう、竹葉さつと卷立て、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤内ちつとも臆せず、讀めたり、讀めたり、さては異國の虎狩な。あの鐘、太鼓は勢子のもの。ここは聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は、孝行の徳に因つて、自然

と逃れし悪虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つて力はじめ、神力ますます日本力、刃で向かふは大人氣なし。虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎと、尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も、畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と、共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎたて、二人を目がけ、いがみ懸るを事ともせず、弓手に撲り、馬手に受け、もぢつて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえいえい、虎の怒毛、怒聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、両方共に息つかれ、石上に突つたてば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、ふいがう吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、やあやあ和藤内、神國に生まれて神より受けし身體髮膚、畜類に出で合ひ、力立して怪我するな。日本の地は離

いがみ懸る

身體髮膚

るゝとも、神は我が身にいすゞ川、大神宮の御祓納受などかなからんや。と、肌の護符を渡さるれば、げに尤も。と押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神秘のその不思議、猛りに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じりゝ、じりゝと四足を縮め、恐れわなゝき岩洞に匿れ入る、尾筒をつかんで跳返し、打伏せ打伏せ、ひるむところを乗懸り、足下にしつかと踏まへしは、天の斑駒、素戔鳴尊の神力、天照神の威徳ぞ有難き。

かゝるところに勢子のもの、群り来るその中に、大將と思しきもの大音あげ、やあ、やあ、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも、主君右將軍李踏天より、韃靼王へ献上の爲、狩出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばばち殺さん。しやぐわん、しやぐわん。とわめきけり。李踏天と聞くよりも、願ふところと笑壺に入り、やあ、餓鬼も人數、しをらしいことほざいたり。身が生國は大日本、風

風來人

笑壺に入る

ほざく

いかなこと

來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と頼む李踏天とやら、石花菜とやら、ここへ突出し詔言させい。ぢきに逢うて用もある。さもないうちはいかなこと、ならぬならぬ。とねめつくる。やあ、ものないはせそ、討取れ。と、一度に劔をはらりと抜く。心得たり。と護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繋ぎし如くに働かず、お、心安し。と太刀差しかざし、群る中へ割つて入り、八方無盡に割立て割立て、撫でまくる。

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、おのれ老耄餘さじ。と、一文字に切りかゝる。なほも神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵に向かひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛懸る。こはかなはじ。と安大人、勢子のものがさいたる劔、かり鏝、數槍、手にあたるを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劔を宙に引つくはへ引つくはへ、岩に打當て微塵になす。刃の光、玉散る霰、氷を砕く

色めき立つ

に異ならず。打物盡くれば官人ども、色めき立つて迷惑ふ。後より和藤内、どつこい遣らぬ。と顯れ出で、安大人が素首をつかんで差上げ、くるくると振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

二王立

この勢に官人ばら、後へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内、二王立に突立つたり。あ、申し御堪忍。御免。御免。と手を合はせ、土にくひつき泣きゐたり。和藤内虎の脊を撫で、うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮柊檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂れを治むるなり。さあ、命惜しくば身方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。とつめかくる。なう、なんの否でござりませう。韃靼王に従ふも、李踏天に従ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、

(一)肥前國(長崎縣)北松浦郡平戸島に在る

一三 千里が竹

七七

出かした

はらけ髪



國姓爺正本挿畫

お情頼み奉る。」と、地に鼻つけて畏まる。

「お、出かした、出かした。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添のちひさがたなはづし、これも當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやら、こぼつやら、絲鬢厚鬢剃刀次第、瞬く間に剃りじまひ、二櫛半のはらけ髪頭は日本、ひげは韃靼、身は唐人、互に顔を見合はせて、頭ひやつく風引いて、くつさめ、くつさめ、むら雨、むら雨。」と、涙を流すぞ道理なる。親子どつと

うち笑ひ、そろひもそろうた供廻り、名も日本に改めて、何左衛門何兵衛、太郎、次郎、十郎まで、面々が國どころ頭字に名のり、二行に立つてぼつたてる。「承り候。」と、御先手の手振の衆、ちやぐちやう左衛門、束蒲塞右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、白城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衛門、じゃが太郎兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參の御供先、あとに引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取る、口取る、國を取る、譽は異國本朝に、踏跨げたる鞍あぶみ、虎の脊中にうち乗つて、威勢を千里に顯せり。

— 國姓爺合戦 —

教化上より見た近松〔自修文〕

藤村作

教化の目から見れば、巢林子の時代淨瑠璃は、悉く武家精神の通俗宣傳たるものである。元祿時代は主従の上下關係と、軍人たる職責の性質とを基礎とし

教化 教へ導いて善に化する。
 (一) 文學博士 福岡縣柳河の人 東京帝國大學教授。
 (二) 近松門左衛門。時代淨瑠璃。年代の遠い往古の事がらを脚色した淨瑠璃。職責上の責任。

教化上より見た近松〔自修文〕

て成立した武士精神と、個人の福利を營むを本務とした町人精神とが階級的に獨立して、未だその相互の浸潤感化を著しくしなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。

その後兩階級の間、兩精神の浸潤感化が次第に行はれて來たのである。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として、政治當局者や識者の憂となつたのであるが、町人の武士化は、それが階級制を壞すやうなことでない限り、多く問はれなかつた。のみならず、實際町人の徳操品位を高めたものは、その感化であつたのである。この武士精神を町人間に宣傳して、町人の武士化を促した上に、近世の所謂通俗文藝の功の多いことは、固よりいふまでもあるまい。巢林子の如き、この方面に於ても、蓋しその尤なるものである。彼は新淨瑠璃の源頭に立つ人で、彼によつて淨瑠璃文學は大成されて、爾後の作者は、一人として彼の直接間接の感化を受けてゐないものはない。極端にいへば、他は悉く摸倣追隨者である。かうして彼によつて大成された新淨瑠璃時代物の内容は、殆ど彼以來固定した有様であるが、その中心たるものは、

識者
見識をもつたもの。
問はれなかつた。
告められなかつた。

尤なるもの。
優れたもの。
新淨瑠璃
通俗主義に根柢をおいてゐる。
源頭
みなもと。

武士道精神に他ならぬ。時代の選び方は、王朝時代であらうと、武家時代であらうと、また場所が我が國であらうと、外國であらうと、説話の根幹となつてゐる精神は、常に近世武士道精神である。



近松門左衛門

この精神を表現するに、彼は彼の所謂「慰み」を目的とした民衆的な藝術の衣裳を以てした。天皇であらうと、公卿であらうと、武士であらうと、町人的な性質の一部をもたしめることを必ず試みてゐる。彼のなした時代錯誤や、階級混同は、彼の無智無學から起つたのではなくして、彼の藝術上に意識した目的から來たことである。彼はこれくらゐなことを知るだけの歴史上の知識はもつてゐたに相違ないが、無智な民衆の娛樂を目的とした爲に、これを犯すことを辭しなかつたのであらう。このことを教化上から考へて見れば、寧ろ彼の藝術の強みである。

時代錯誤
時や年代をと引違へること。

藝術意識
詩歌、音樂、
演劇や美術な
どの藝術に對
する心の感覺
作用。

功利主義
十八世紀十九
世紀にわたつ
てイギリスの
ベンサムやミ
ルの唱へた倫
理説で、自分
の行為の結果
が最大の幸福
となるのを以
て善と定める
主義。

(一) 藤村 著。東
京至文堂發行

彼の藝術意識が、馬琴などの如き儒教風の功利的教訓主義のそれではなかつた爲に、彼の藝術は馬琴物の如き淺膚露骨な教訓物に墮せず、濟んだ。そして教訓物に墮さなかつたところが、教化上一層有効であつたに相違ない。眞の感化は期待せざるところに多くある。文藝も教訓物よりは、却つて教訓物ならぬものに多くの教化が期待されることが多い。武士道精神を主内容として、通俗的で受容れ易く、美しい麗しい色と甘い味とをつけられた娛樂的な藝術の形で創作され、作毎に一代の人心を沸かしたものであるから、その社會教化上の効果の少くなかつたことは、想像するに難くないのである。たゞ政治家の事業の如く、若しくは學者の著述の如く、その効果を計る尺度のない爲に、或は世人に看過され易いが、若しここにこれ等を平等に計量し得べき方法があるならば、彼の直接間接の社會教化上に於ける業績の、いかに偉大なものであつたかゞ、明瞭に知り得られるであらう。

(一) 上方文學と江戸文學

一四 月前納涼

本居 宣長

このもかのも

みな月の二十日のほど、大方もこの頃は暑さところせきほどなるを、まいて朝より塵ばかりも曇なく照りはたゞく日影の、西日になるほどよに堪へがたくて、思ふどちうちとけたる物語をだにし、てまぎらはさばやと思ひて、睦ましくあひ語らふ友だちの許にも、のしつなきほどにやあらんと、おぼつかなく思ひしものも、けふはものへなんまかりぬるといふに、いと口惜しくて歸りなんとするほど、このあるじ歸り來て、まづ見るより、けふの暑さをかへすがへすいひつゞけ、汗おしのごひ、扇うちならしつゝ、ともなひ入る。南おもてなる所、いよすかけわたし、あたりあたりいとさはらかにしつらひたる、いと涼しげなるに、夕風まちとるべきはしつ方に、つゐたるに、かつが暑さも忘るゝ心地して、すのこのはしに出でて見いだせば、庭の梢どもいづれとなく茂り合ひたるものから、木だちうとましからぬほどにつくるひなして、このもかのもに、はかな

き柴垣懐かしく結ひわたしなど、しめやかに見どころあるさまな
 り。夕づけゆくほど、軒近きくれ竹の下風、心もとなきほどにうちそ
 よめきたるも、あかぬ心地のみぞせらるゝ。稍ありて、同じ心なる人、
 またふたりみたりなん來あひたる。さうさうしかりつるに、いと嬉
 しくて、はかなき物語も、今一きは心ゆく心地す。心へだてぬどちの
 まどゐは、なべてうちとけたるなんよきを、ましてかく暑きにはい
 かでかかしこまりもおきあへはべらん。むらいの罪はゆるされな
 ん。とて、ほとほと帯などもときちらしぬべし。あるじなきけある人
 にて、庭のたていしなどに水そゝがせたる、夕立のなごりおぼえて、
 木々の下枝うちなびきて落つる雫も、いひ知らず涼しく見ゆ。やう
 やううちと暗くなり行くに、さゝやかなるわらはの出で來て、とも
 しび近くともせば、いでやけぢかくていとあつかはし。こよひはと
 うるにてをありなん。この火けちてよ。といふ。げにさもはべらんと

又竹
 吳竹
 河竹
 竹の
 竹の

秋
 秋

したりがほ

て、たちていぬるほどもなく、せんさいの茂みにたてるに、火入れた
 る、ほのかなる影に、青葉の露きらきらと見えて、同じく吹く風も、殊
 に涼しくぞおぼゆる。夏の月なきほどは、庭の光なきいとむづかし
 くおぼつかなきものなるに、この光なからましかば、いともののは
 えなからましをとて、みな人めであへるに、あるじのしたりがほな
 るも、ことわりなりかし。かくてよひ過ぐるほど、こだかき松にほの
 めく影は、月出でたるならんとて、東のつま戸おし開きてまつほど、
 とばかりありて、いと華やかにさし出でたるは、また似るものなく、
 涼しくおもしろきには、とうろの光も、今ぞむとくに消たれにたる。
 風さへいとひやゝかにうち吹きたるは、ふる川のべの杉の下かげ
 ならねども、秋やかへりてなど、うちずしのゝしる。大かた月は、秋を
 こそめでたき時に、いにしへよりいひおきたなれど、この頃の空に
 かくてまち出でたるほどよ、たとしへなく心もすみて、ものむづか

(一)「涼しさは秋
 やかへりては
 つせ川のふる
 のかほの邊の杉
 の下蔭。新古
 今集、有家朝
 臣

むとく

しさも、こよなくまざるゝわざになん。

——鈴屋集——

一五 蓮を栽う

伴 蒿 蹊

庵の坤の方に池あり。もとは心して造りたるさましるきを情なき人の假住ひしたるほどにやちりあくたの湊となしてけり。過ぎし秋ここに移りて、蓬葎かき拂ひにしついで、この池をもをさむべかりしを、事しげくてうち過ぎぬ。冬はかきこもりてのみあれば、心も寄せず。この頃なん思ひおこして、水たゝへ蓮栽ゑんとす。

抑、この蓮は佛の道には妙なる法の譬とし、樂みを極むる國の莊嚴にも、一のものとして説かれたるやうさまざまなり。かれ晋の慧遠法師も蓮社の交を結ぶ。儒の人にして翫びたるは、宋の周子はじめにや。蓮は花の君子なるものといへるが、なほ葉に置く露の光も潔き操に譬ふべかめり。何かは玉と欺くと詠まれたるは、たゞたは



(一)支那東晋の名僧。廬山白蓮社。祖。義熙十二年(西曆四一六年)歿。年八十三。
(二)周茂叔。宋の熙寧六年(西曆一〇七三年)歿。年五十七。
(三)蓮葉の濁にしまぬこころもて、なにかは露を玉と欺く。古今集僧正遍昭

穢カミ

spicily 女史

水邊菊
行水はもと
のみつにも
あらなくに
うつろふ菊
の香こそか
はらね
蒿 蹊

(一)「子在川上。曰逝者如斯夫。不舍晝夜。」論語
(二)孔子登東山。而小魯。登太山。而小天下。」孟子



伴蒿蹊筆蹟

凡そものにつきてみづからを戒め、人を教ふるは、賢き人の常にして、器物に銘せるはさらなり。孔子ひじりも、水に臨みては逝くものは此の如きの歎あり。山に登りては魯をすこしきなりとし給ふ思あり。されば徒に物を弄べば志を喪ふの戒も聞ゆかし。しかはあれど、假初なることにも道理がましく人まねにいはんはまた苦し

一代の宗師
百世の儀表
Socrates
(西曆前四七〇年—三九九年キリシヤの哲學者)



一のそ (筆陵岳村中) 養 供 糜 乳

からずや。籬の菊を手摘みて、長閑に山の端を望むといひし人は、何の心にかあらん。これ等を味はひなき味はひなどいはんは、なほ心あるに似たりかし。

風かをる汀になれて夏は見ん
うき葉のみどり花の白たへ

一六 世界の四聖

高山林次郎

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテース、キリストの四人、世呼んで世界の四聖

と稱す。宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度、伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名は悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳、その妻子を棄てて王城を遁れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今

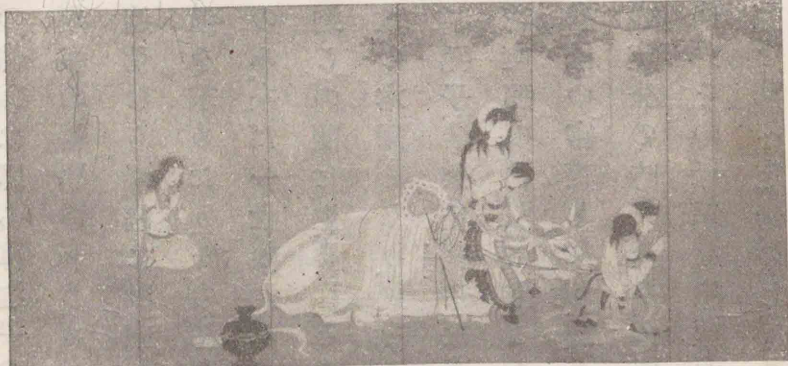
(一)伽比羅衛とも書く。

成道

正覺

巡錫

(二)ガンジス河の支流。



二のそ (筆陵岳村中) 養 供 糜 乳

談理

元々
歸命の大道

木鐸

令聞

(一)景公。

の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を喜びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹てて相争ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道につかしまるに足らず。釋迦この間に生まれ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司空の職に就く。治績大いに舉り、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、

老軀を挺す
門下の高足

蕩然として地
を拂ふ

教化の陵夷

狂瀾を既倒に
廻らす

老脚蹉跎

下學して而し
て上達す

五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、或は子にしてその親を害するものあり。強は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子すでに志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らすんとす。志や高且つ大なりと謂ふべし。此の如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くるものなし。ここに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼、我が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子を知るものなからんや。孔子答へていはく、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾を知る

〔Athens
府。ギリシヤの首

詭辯學派

諄々として倦
まず

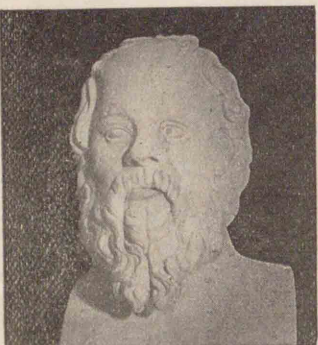
侃諤の正義

ものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。我が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後いくばくもなくして歿す。時に年七十三。
ソクラテースはギリシヤの^(一)アゼンス府に住める一彫刻師の子なり。その生まれたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。ギリシヤの當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争にとゞまり、道徳は空文の上のみ貴ばれたり。その状、なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して殆ど裨益するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して、一步も假借せず。侃諤の正義、その稀

喬木は風に折
らる

代の雄辯と相俟ちて一世を風靡せり。

然るに、喬木は風に折らる。」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはいく、ソクラテースは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテースがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞



ソクラテース

理ならざるはなし。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。その獄中に在るや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、乃ち答へていはく、

何爲るものぞ

(1) Asklepios.
エスクラピウスともいふ。
醫藥の神。
謝を致す

(2) Juden.

(猶太)

(3) Bethlem.

エルサレムの南約二里餘

(4) Joseph.

(5) Johannes.
當時の學者で
宗教家

「余はたゞ正義に導かれんのみ。死また何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテースいはく、爾一鶏を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し、曾て病みし時平癒を祈りて、謝を致すことを忘れしが爲ならん。ギリシヤの聖人ソクラテースは此の如くにして逝きぬ。年七十。

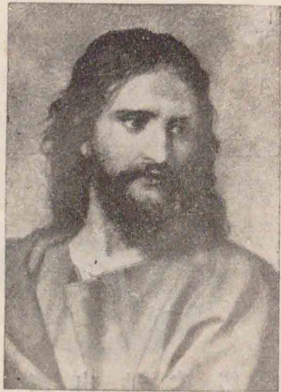
キリストは本名を耶蘇といふ。キリストとは、膏灌がれたるもの。といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベトレヘムに生まる。その生後四年を以て西曆紀元第一年となす。父はヨセフとよべり。賤しき木匠にして、母をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間ユダヤの各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。抑、當時はローマ帝國の榮華正にその極に達し、禍亂の萌芽内に

胚胎す
寧日なし

放縱の俗

救世の使命

晏然



胚胎し災異頻りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國たるユダヤは、久しく暴君の収斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇なる淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。ここに於て一世の人心は悉く偉人の現出してこの暗黒なる社會を照破せん

キことを渴望せり。キリストこの間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等はこれを喜ばず、以て猥りに新法異説を唱へて民を迷はすものなりとなし、キリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこのことあらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りていはく、「神よ、彼等を赦せ。彼等はその爲すべきところを知らざればなり。」

轉軻不遇



高 山 林 次 郎

以上は四聖の略傳なり。その人物、事蹟の
高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇
拜すべきところなり。四聖の中釋迦を除き
して、その教を天下に弘む。キリスト教即ち
これなり。

ては、いづれも轉軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方
に得ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテース
とキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊
と並びて十字架上に磔殺せられたり。悲惨なりと謂ふべし。然れど

浩大
無邊

もこれ等の人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍福と一
身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就
くや、晏然としてなほ歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へず
して、却つて、我が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん」と嗟
嘆せり。釋迦は衆生の爲にその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に
乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言してはいはく、正義
を信ずるものにとりて、死はた何爲るものぞ。吾をして一日の生あ
らしめんか、その一日即ち國民の迷を醒さざるべからず」と。キリス
トは己を罪に陥るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲
の浩大にして無邊なる。

—— 櫻牛全集 ——

一七 道まなぶ人

松平定信

かの人は雪ほたる集めし窓に年を積みて、ふみ見る道に心をつ

五つのつね
五つのみち

くしはべるなり。されば世の中のことには、いと疎くはべりといへば、さることまことの道まねぶ人なりけれと、ほめものするものもありとや。もとより道まねぶものは、五つのつね、五つのみちよりして人ををさめ、己ををさむる道まねぶよりほかのことはなし。されば世の事にさとく、今のあたりのみかは、千とせのさきつ世の事、見ぬもろこしのむかし今のさまより、さかりおとろふるさざし、人の心の上より、仕ふる道のくさぐさに至るまでも、明らかなるをこそ道まねぶ人とはいふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とはいふべからんと。

○ 或翁に、かの人はいかなる人にかと問へば、いとよき人なりと答ふ。彼はといへば、よき人といふ。必ず彼をば悪しきといはんを選びて尋ねみるに、よき人と答ふ。いかなることぞと尋ねしに、人を見る

には、まづ十にして五つばかりもよきことあるは、いとよき人と見るべし。十にして一つ二つもよきことあるはよき人なり。十にして皆悪しきをば悪しきと心得給へ。といひしとぞ。こは人をかく見るなり。われを見るの道ならず。善きも悪しきも、かるきと重きとのわかちもあらんかし。

○ 道路は足底の廣さだにあらば歩むべしといふは、例のことわりのみなり。いかで歩むべからん。梁の上を歩まば落ちぬべし。こはかの陳氏のいひたる餘地なきなり。あまりに事に甚だしく物にせちなれば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物にたいして餘地なきなりと聞きぬ。

○ 目しひしもの、人のいひ難きことをもいふは、色も見えず、氣色

(一) 顔氏の誤である。「人足所履不_レ過_二數寸_一」
無_レ餘地_一故也。
(顔氏家訓)

にも知らねばいふなりけり。くらき人は我が悪しきも見えねば、善しと心得て人に耻ぢざるは、目しひし人のたぐひなり。されば古よりおもてにかきするなどともいふめり。

○ 或やんごとなき人、旅の道は早くいねて、つかれをだに休めなば、下が下までも憂きことはあらず。さらば早くやどりを立出でて、早くやどりにつくに如かず。これぞ下を惠む道なれば、喜びぬべしといひける。まづその君早くやどりにつきて、かうしおろし、もし出して晝の半ば頃よりいぬれど、下のものは我が心のまゝならず、人のいぬる頃ならではいぬ難し。殊に晝のうちにはさわがしく、道行く人も絶えぬを、世の人に背きて夜なりけりともいひ難く、いねんとする頃その君ははや起出でて、夜半にともそろへて立つめり。下をあはれむ心はあれど、上の心もて下を見るより、かくはたがふなり。

惠む心ありて下のこと知らねば、かくぞありける。

○ 生まれてものおぼゆる頃より老いゆくまで、聊かも怠らずすることあらば、必ずいかなるわざにも秀でぬべしといへば、たゞに心もちふるにあらざれば、いくたびなすとも得べしとは思はず。この飯くひ、汗すふは、ものおぼえてより日にみたびはかくることなけれども、かくせんと思ふ心なければ、飯くふに上手もなく、かへりてくひこぼし、またはいをの骨たてしよなどいふもあるべし。さればかくせんと思ふ志のひとつなりといひし。

○ 鷹の羽にすむ蟲ありけり。空たかく飛びかける時は、遙かに人の住家などをも見くだしつげに、我は事足れる身かな、翼も動かさず、千さとの遠きに行通ひ、雲のよそまでもあがるめり。ことにさま

しむら
やから

ざまの鳥は皆おそれてにげはしる。げにも我に勝つものは大かた
あらしなど思ひつゝ、かの鷹の毛のうちにあつゝ、頻りにしゝむら
をさし、血を吸ひてゐしが、そのやからいと多くなりもてゆきしに
やつひにその鷹も斃れにけり。それより自ら出でて飛びかけらん
と思へども飛び得ず、走らんと思へども速かならず。血もつき、しゝ
むらもかれぬれば、今は命つなぐやうもなし。からうじてまづその
毛のうちをくゞり出でてはひゆけば、雀の子のゐたりけり。我をお
それなんと見れば、雀の子は知らぬさまなり。いかにして見つけざ
るかと傍へはひよれば、嬉しげに見て、くちばしさしいだして、つい
ばまんとす。例なきことなれば、おそろしくてにげ隠れぬと、かの友
どちに語りにつけり。

—花月草紙—

一八 石彫獅子の賦

薄田 泣 董

番者に問へば石工は、
入りて小暗き仕事場に、
圓き頸を手になでて、

木かげの夢に耽りぬと。
刻みさしたる唐獅子の
誰ぞ吟ずるは、静やかに。

朽木の棚にすゑられて、
豕、狗兒、野の狐、
こは秀でたる驕かな、

顔くすぼるゝあら彫の
さてはを鹿のむらがり
日浴びて立てる獅子の影。

裂けたる岩に爪かけて
たてがみ長く背にまきて、
胸はゆたかに力男が

雄々しいかその姿、
見れば湧きよる春の潮。
ひきしぼりたる弓のごと。

忿怒現する明王の

焰かながき尾は躍り、

落ちし野薔薇の花ふむも、

(石工妙じき心得よ)

光を知らぬ盲目の身、

いまだ前脚ふみあげて、

鑿の手またく捨てられて、

緑したゝる木のかげに、

雄姿いかに背に伏して

二

ひろき肩より燃えあがる

綿毛密なる脚の裏、

巢くへる鳥はめざめんや、

瞳子彫られぬ唐獅子は、

鼻かんばしき香を嗅ぐも、

花園小路みださじよ。

御苑の夏のあけぼのや、

巨人の如く立たんとき

しばし想像にふけらせよ。

汝の王者かたどられ

野より山より林より、

蹄の前にひざまづき、

偉なる靈魂くだりきて、

野より山より林より、

その光輝に浴みぬべく

大なる權威あらはれて、

野より山より林より、

王にさゝぐる燔祭の

斑の牛と羚羊は、

真白き石に刻まれぬ。

つどへよ獸列なりて

弱きを駆ちて僕たれ。

真白き石に包まれぬ。

つどへよ獸列なりて

卑き心をなげうてよ。

真白き石に具せられぬ。

つどへよ獸列なりて

聖き火盞を整へよ。

ふかき痛手に甘んじて、

進みて燃ゆる火に焼けよ。
高きほまれは汝にあり。

誇るべきかな犠牲の
羨む群どおろかなる。

見よ犠牲はそなはりぬ、
ながき流をふるはせて、

獅子は額にたてがみの
あら起ちあがる、戦鬨と

勝と力の權化なり、

伏せよ。と呼べば皆伏しぬ。

さかんなる哉その令や、

自然は死せりとことはに、

人は魔のごと強からず、

われは王者ぞ、萬有の

値の源ぞ、わづらひと

もだえの胸のあるじなり。

あゝ、運命の眩きをも、

眼ひらいてながめ入り、

胸わなゝかぬ雄心の

若き勇氣に溢れたる、

勝利のおもひに漲れる、

この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、

われは汝の伴なりと、

聲は喇叭の音に似たり。

時に黙止はせぶられて、

たかき讚美と服従は、

雷のとよみに現れぬ。

三

いま想像の羽たゆむ。

見れば唐獅子日を浴びて、

豊かにもまた静かなる

すがた何等の誇ぞや。

石彫ながく傳はりて、

榮とならんは幾千歳。

あゝ、藝術は支配せよ。

とはの生命ぞ汝に歸する。

—のく春—

一九 芳宜園大人の靈を祭る

村田 春海

(一)加藤千蔭
うなねつきて
このかみ
(二)賀茂眞淵
おととえ

ここに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大人の御前(一)に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも、君は吾に十といひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさ(二)にさかりの齡におはして、吾はまだわらはにてぞはべりける。常に縣居の庭にも、の學びにゆきかひたる時、あしたに参るとしては、君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべに罷るとしては、君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては、君を師ともたふとみ、歌作るとしては、吾をおととえのつらにぞ教へ給ひける。

世のさが

ありふる
まめごと
あだごと

さうひ
はるの色は
おもひわす
れし夏陰に
錦をみする
花その花
春海

中ごろにして君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕をしぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては、吾道しるべをなし、月を思ふとては、君が舟に相乗り、憂き事もともに憂へ、喜ばしき節もともに喜びて、世にありふる業の、まめごと(三)もあだごと(四)も、かたみに隔なく心をかはせつること、今にはたとせ、その初を繰返し數ふれば、あひ友たることすでに五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にか相見ん、いづれの時にかこととはん。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらんか。るを誰かはよく堪へん。

七
て
は
の
も
は
る
の
色
は
おも
ひ
わ
す
れ
し
夏
陰
に
錦
を
み
す
る
花
そ
の
花
春
海

蹟筆海春田村

れて來しが、またも參らん。とて歸らんとせしを、翁止めて、今宵は月もよし、薄酒進め奉らん。しひてとまり給へ。といへば、翁の心をいかで背くべき。さあらば。とて、各座をしめて、清談の露やうやう繁きほどに、家人やがて心得て、取敢へぬまでにあるじまうけし、香取添へて、盃出しけり。諸客皆酔ひて、興に入るとぞ見えし。その中に一人盃をとめて、青天有月來幾時。我今停盃一問之。と李白が詩を高らかにうち吟じけるを、また二人脇よりつけて、人攀明月不可得。月行却與人相隨。と歌ふ。また外の人々迭に唱和して、その次を、皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發。と歌ふ。またその次を、但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。白兔搗藥秋復春。姮娥孤棲與誰隣。と歌ふ。その次よりは翁も助音して、今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人如流水。共看明月皆如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏。と歌ひをさめけり。その後數獻に及びて、玉山倒る、ばかりに見えけり。

玉山倒る
玉山倒る

(一)「大方は月を
もめでじこれ
ぞ人の老とな
るもの。古今
集在原業平

一丁字
一丁字

舌を食ふ
舌を食ふ

騷人墨客
騷人墨客

さて翁いふやう「大かたは月をもめでじ。」とは詠みたれども、老の心も、月見るにぞ慰みはべる。されど、それにつきて、千載無窮の感も起りぬれば、うべ月を、人の老となる。ともいふべかめり。但し、月を見るにいろいろあり。今思ひ出しはべり。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、獨り隅に向かひてゐたりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくづくと見て、「月は徑幾尺かあるべき。各考へて見給へ。」といふ。また同じやうの人かたへより、「あれはものの切口と見ゆ。奥へ長さいかほどかあらん。」とて、たがひに僉議しけるを、聞く人々皆舌を食ひけり。翁も幼心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞して光の明きを誇り、影の清きにめでて、良夜とてたゞうち寄り、もの食ひ酒飲みなどして、歌ひの、しるを樂みとするは、かの寸尺を語るに等しかりぬべし。また騷人墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、それまた景氣の上を翫ぶ

騷物思
騷物思

洞觀す

(一)支那楚の屈平
及びその門下
後輩の辭賦を
編輯したものが

ばかりにて、月に深き感あることを知らぬなるべし。
翁が千載無窮の感と申すは、我が儕古人を慕ひて、その書を読み
その心を知りつゝ、常に世を隔てたる恨あるに、月ばかりこそ世々
の人を照らし來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月
に對して昔を忍びては、さながら古人の面影も映るやうに覺え、月
はものいはねども語るやうにも覺え、忘れては昔のことを聞はま
ほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣を棄てて、一氣に古今を
洞觀して、『青天有月來幾時。』といひ出づるより、氣象の高さ、拔群に聞
えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべきことがらにあらず。
昔より李杜とて、杜甫が上に稱するも、理にてこそはべれ。然れども、
李白が詩も古今流水の如きを感ずるまでにて、後代を待つ心の心は
見えぬ。翁昔楚辭を讀みて、『往者余不及。來者吾不聞。』といふに至りて、
屈子が心を推量りつゝ、感にたへずなん覺えし。この二句の意を思

ふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠に我が心を得たれ
ば、あはれ一たびあうて語らんと思へど、その世に及ばねばかなは
ず。また末の世にさる人のありて、我と心を同じうすらんと思へど、
その人を聞かねば、誰とか知らんとぞ。これ獨り屈子に限らず、古今
心あるきは、大方この恨なきにしもあらず。翁もこの心にて月を
見ればにや、いと感深く覺ゆるなり。元より今は末の世の昔なれ
ば、いづれの世にか、また我が如く月に對して、今をしのぶ人もあら
ん。月はさこそその世をも照らすらめ。若しあつらへ告げらるゝも
のならば、月にさば一言をもこのさましと思ひはべる。その意を、
月みれば末の世までもしのばれて
みぬいにしへのいとどゆかしき
ここをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。い
はれなきにはあらず。

— 駿臺雜話 —

二二 秋色を觀じて人事に及ぶ その一

三宅雪嶺

(一)天武天皇の妃。

(二)萬葉集卷一。
はるさりくる

春花の爛漫たるは妍にして艶秋葉の霜に飽きて丹化するもまた稍相似、その優劣を談ずる、古よりこれあり。天智帝の春山萬花の艶と、秋山千葉の彩と、いづれか優れると宣へるに、額田女王こたへて、
(二)ふゆごもり、はるさりくれば、なかざりし、とりもきなきぬ、さかざりし、はなもさけれど、やまをしみ、いりてもとらず、くさふかみ、たをりてもみず、あきやまの、このはをみては、もみぢをば、とりてぞしぬ、あをきをば、おきてぞなげく、そこしおもしろし、あきやまわれは。
と霜葉の二月の花に優るを陳べにき。しかも女王の擇びしところ

春 艶
秋 宏壯

宇宙朗曠

は、他の必ずしも肯ぜざるところ。人各判断を異にし、決着に到らんこと難し。今は姑くいはじ。但し春を觀るに寒風樹を吹くの時、梅花まづ蕾を破りて、清香衣袖に溢れ、これに續きて桃、續きて櫻、海棠、然る後萬花妍を競ひ、紅紫山野に滿つ。花に嫩葉の緑を添ふるあり、添へざるありと雖も、皆枝條に點綴し、瓣の軟風に吹かれて、繽紛飄落するは、眞に優にして、裏なるを示すもの。稱して美とせんか、春は即ち艶麗とすべし。

更に秋を觀るに、秋碧空に浮かびて、宇宙朗曠、滿目たゞ濃黄と爲り、渥丹と化し、黄なるは黄金を敷き、丹なるは錦欄を張り、壑に懸り、溪にわたりて、錦障を聯ぬるの状を現す。色彩を以てせば、遙かに春花に優るとすべく、而して丹朱爛然として、野火の烘ゆるが如きけ、寧ろ甚だしきに過ぐ、同じく稱して美とせんか、秋は即ち宏壯とすべし。

(一)宋の人。字は永叔。唐宋八大家の一。

慘澹慄烈

(二)おくれなば梅も櫻におとるらん。魁けてこそ色も香もあれ。殉難録稿。河上正義。繡を纂め錦を綴る。

秋の景色は實に天高く、氣清み、草木齊しく色を變じ、野に、山に、燦爛として光彩眼を奪ふ。しかもその極るの時は、正にこれ樹葉飄零して、寂寥の觀を呈するの時、歐陽修が秋聲賦にいはいはく、初淅瀝以蕭颯、忽奔騰而砰湃。如波濤夜驚。風雨驟至。其觸於物也、鏦々錚々。金鐵皆鳴。又如赴敵之兵、銜枚疾走。不聞號令。但聞人馬行聲。その秋聲とは即ち凋稿せる樹葉の、互に接觸し若しくは飄零して窓を撲ち、地に墜つるを指せるもの。その一望丹黃華麗をつくせるところは、かくして搖落し、慘澹慄烈たらんとす。

古來人の春花を引きて譬喩するもの多し。梅花の寒を凌ぎ、雪を冒し、玉肌芳香を放ちて而して散去る。所謂魁けてこそ色も香もあれといふの類なり。されど秋葉の丹化し、繡を纂め、錦を綴り、璀璨として目を眩まし、然る後飄零して擧げて一空に歸するも、また頗る見るべからずとせず。これを人事に喩ふる、少壯事を起し、險を冒し、

春花と秋葉

人事

林業

(一)武將。武蔵の朝人。最初源義平氏に從つた。後平氏に屬した。越前平維盛が越前の時、これに從つて戦死した。

一敗して命を殞す。悲慘悽愴、人をして哀を催さしむれども、年すでに老い、經歷あり、功勞ある身にして、なほ發憤事を擧げ、運命に安んじて、從容生を授くるは、他の感を惹くの一層深きことあり。敦盛の一ノ谷に陣歿せる、今に及びてなほ人の説くところ。須磨の邊に種の遺物あり。或は敦盛蕎麥などいふもあり。遺物の偽造なるはいふまでもなければ、附近の地に名勝古蹟の人言に上る、能くこれが右に出づるあらず。しかもこれたゞ事情の哀なるが爲にして、恰も春花の早く香を放ち、軟風に飄落すると同じ。齋藤實盛、七十鬢髮を黒くして戰場に臨み、軍利あらずして餘衆皆退散せるに、乃ち單身留り戦ひ、我が頭を斬り、木曾公に獻ぜよ。と呼ばはりて死したる如き、はたまた三浦義明の九十に垂んとして、頼朝の擧兵を援け、戦敗れて頼朝の死を聞き、その子に語りていふ、公は一敗を以て死するものならず、汝等必ず索めて隨へ。我は年老いて行く能はず、留り

一一 秋色を觀じて人事に及ぶ その一

てここに死せん」と遂に命を敵刃に殞ししが如き、一種限りなき悽
愴の感を人に與ふ。年老いてその終を潔くするは、普通の事情の哀
を催さしむると異なり、秋葉の爛然として萬丈の錦を織り、而して
秋風に搖落するの形あり。

驕倨放肆

禽鳥の死に臨みて美音を發するあると同じく、人もまた老後に
奮躍して死を妙にするあり。清盛の位人臣を極め驕倨放肆、憚るこ
となき、誰とてこれを憎く感ぜざるはなしと雖も、その病みて將に
死せんとし、吾死するの後は必ず佛に供へ經を唱ふること勿れ。た
だ願はくは賴朝の頭を斬りて墓前に懸けよ」といへる、幾分の同情
を惹くに足るなり。賴朝は業遂げ、志成り、手に兵馬の權を握りて永
久の基を立てしかど、臨終の際に特に見るべきなく、或は兇手に斃
れたりとさへ傳へらる。彼資性善く忍び、喜怒色に現れず、深く謀り
遠く慮り、坐ながら天下を制御するに至れる、以て器度の一世に超

器度

耳順
鵬搏萬里

慎計密謀
(一)或人が家康の
性質を評して
「鳴かぬなら
鳴くまで待た
う子規」とい
った。
危道を踏む
(二)上杉景勝。
(三)石田三成。秀
吉薨後、上杉
景勝と謀つて
家康を倒さう
とした。

卓せしを見るに足ると雖も、天真を發露して人心に愉快を感ぜし
むるに至りては、却つてこれを清盛に看ること多し。秀吉すでに天
下を一統し、齡また耳順に及び、乃ち鵬搏萬里、師を朝鮮に出し、進み
て明に入らんとし、陣營に勞する約七年前には必勝の算を立て一
一皆中りしに、ここに於て計るところ數齟齬し、竟に何の得るとこ
ろなくして終りたるが、その豪邁雄略、人心を發動するの大なるは、
即ちここに存す。これまた終を壯にせるものと謂はざるべからず。
家康は慎計密謀、所謂子規に對し、鳴くまで待たんとせしもの。勝利
を萬全に期し、敢へて危道を踏むが如きことなく、隨ひて大慘事な
く、大快事なしと雖も、上杉氏東に起りて檄を傳ふる、直ちに赴きて
これを伐ち、而して石田等以て計策の中れりとし、虚に乗じて大軍
を西に集むるや、遽に軍を旋して關ヶ原に會戦し、親ら馬を躍らし
て諸軍を指揮したるは、戰略の見るに足るなきにせよ。意氣の頗る

(一)慶長十九年
(二)二七四年
及び元和元年
(二七五年)
の兩度、豊臣
氏の舊臣が秀
頼を擁して徳
川氏に抗した
戦役。
安を食る

歸臥す
(二)肥後國(熊本
縣)北郡(肥
後)より薩摩に
入る國道に當
る三個の峠津
奈木太郎、赤
敷太郎、赤松
太郎をいふ。

壯なるを見るべし。後十餘年を経て、歳すでに七十を超え、會、大阪の
役あり。前後二役ともに大軍を督してこれに臨み、遂に覇業を定め
たる、老いて益、壯にして、徒に安を食らざるを知るべく、その行爲の
人に愉快を覚えしめざるに拘らず、なほ當時に傑出したるの疑は
れざる所以なり。

二二 秋色を觀じて人事に及ぶ その二

西郷隆盛功成り名遂げて故山に歸臥し、然る後壯丁を提げて三
太郎を越え、九州を震動せしめしが、此の如きは理の見るべきなく、
若し養成せし健兒の、すでに事を發してまた制する能はず、己獨り
生くべからずとしてこれに一命を授けたりとする、餘りに力なき
に過ぎたり。將力能くこれを制するに堪へしも、實に自らこれを率
ゐて政府を覆し、以て大いに志を逞しくせんとする、即ち餘りに無



筆紅紫村今

原丈五風秋

秋色ヲ觀シテ人事ニ及ブ

(一)日向國(宮崎縣白杵郡)

非命に死す

(二)諸葛亮の字、今の支那山東省の南に蜀の劉備を輔けて天下に覇を唱へた。西暦二十三年(西暦五十四年)で陣歿した。
(三)蜀王劉備の遺策士子劉禪

謀に過ぎたり。いづれより見るも稱するに足らずと雖も、しかも老西郷の一生は、即ちこの戦争を以て、更に一段の生氣を添ふるあり。その可愛の嶽に籠守し、四面遁るゝに地なかりし時、部下數百を將ゐて奮闘圍を脱し、故山に還り笑を含みて死したる、殆ど終を詩的にせるなり。何の爲に起りて何の爲に戦ひたるか、意志判然たらざれども、その判然たらざるところ、却りて豪傑の豪傑たるところを表す。若し彼をして非命に死するなく、徐に天命を終へしめたらんには、位は元勳の首座を占め、聲望當代に並びなかりしならんも、そのいづれが生涯を豪壯ならしめたるかは、いはずして知らる。
(二)孔明年二十七、出でて三分の計を畫し、奇策縱横、謀るところ成り、成るところ功ありしが、しかも皆策士流の事、當時策に於てこれに匹儔すべきものその人に乏しからず、而して多く稱するに足らず。たゞそれ窮時に方りて、顧託を受け、遺孤を擁して、艱險に當る。誠意

三代 夏殷周
逆勝

權を挟み私を營む
 鞠躬
 (一)夏殷周の三代
 荒唐
 (二)元の太祖。名は鐵木眞。帝位に即いて成吉思汗と號した。西曆一十二二七年一二月二十七日
 (三)Oron。外蒙古。黒龍江の上流。黒龍朽ちたるを推き枯れたるを拉ぐ
 (四)甘肅省
 (五)阿骨打の滿洲に立てた王國。十世百二十年間
 (六)陝西省、華陰縣の東
 (七)今の河南省汝陽道
 (八)唐を距る西へ凡そ百四十里

忠節少しも權を挟み私を營むの跡なく、成敗利鈍逆め料り難く、鞠躬盡力死して後已まんを期し、出でては將入りては相病を力めて大事を處し、終に陣中に終りしが、群雄の中に特出し、人臣たるもの儀表と爲れる實にここに於てし、彼はこれを以て殆ど聖の域に到り、三代荒唐の時代と雖も、能く及ぶ鮮し、成吉思汗難河畔に起りて四方を經略し、雄師向かふところ朽ちたるを摧き、枯れたるを拉ぐが如く、西亞を蕩定して東歐を侵占す。然るもその累りに領土を拓けるは、恰も蠻酋の暴力を振ひて止るを知らざるの觀あれど、還りて六盤山に到り、病みて死せんとする、左右に語りていふ、金の精兵潼關に在り、南は連山に據り、北は大河を限る。以て遽に破り難し。道を宋に假るに如くはなし。宋と金とは世讐、必ず能く我に許さん。乃ち兵を唐鄧に下し、直ちに汴京を撞け。汴急ならば必ず兵を潼關に徵さん。而して數萬の衆を以て千里赴き、援はば、人馬疲弊し、到

(九)今の河南省開封府

(一)Chatham. 英國の政治家。少ヒットの父なる老ヒット。チャタム伯と稱する。(西曆一七〇八年一七七八年)

(二)Richmond.

(三)Philip Sidney. 英國の貴族。文武に通じ、一代に才名があつた。(西曆一五五七年一五八六年)

ると雖も戦ふ能はず。これを破らんこと必せり。と。その敵を料り、勢を察する、實に掌を指すが如く、眞に智略の遠く人に超えたるを見る。
 (一)チャタムは一代の偉績、英國の威名をして隆々世界の表に耀揚せしめ、世に第一流の政治家を以て目せらる。しかもその大なるの感ぜらるゝは、ここに在らず。すでに官を罷めて後、英政府の米洲植民地に苛政を施きて、誅求到らざるなきを攻撃し、以て雙者の間を善くするに努め、而して一旦米の佛と勢を聯ねて逆ひ抗し、而してリッチモンドが戦争を不利として講和を主張するに及び、翻然前説を棄て、病を扶けて議院に臨み、絶叫すらく、ブルボンの前には決して膝を屈すべからず。飽くまで戦争を繼續して、最後の勝を占めざるべからず。と、氣昂り、胸塞がり、その場に卒倒し、昇がれて家に歸り、終に瞑したる、これ誠に七十年の生涯を振はしむるに足れり。プ

Elizabeth
英國の女皇。
(在位西曆一
五五八年—
六〇三年)
眷顧

イリッブ・シドニーはエリザベス女王の眷顧を被り、名を當代に騁
せにき。しかも後人の感歎して措かざるは、特にその臨終の光輝を
放てるに於てす。英軍に將としてオランダを援け、スペインと戦ふ
や、飛丸に腿を貫かれて倒れ、流血淋漓、渴を覺ゆる頻りなり。從者百
方搜索して僅かに一杯の水を得、捧げてその前に至る。傍に一兵卒
の傷つき倒るゝあり、氣息奄々、從者の盃を捧ぐるを凝視して、心に
大いに羨むもの如し。シドニー盃を口にせんとして偶、これを看
乃ちいふ、彼のこれを要する、吾よりも多からん。と。盃を垂死の傷兵
に與へたり。これ後人の、今に及びてなほ嘖々として稱するところ。
若し彼が最期に於てこの事なかりしならんには、シドニーの名は
或は忘れられたるやも知るべからず。しかも年壯なるシドニーの
光輝ある最期や、寧ろ爛漫たる春花の風に散ると狀を一にし、麗は
則ちこれありと雖も、未だ壯とすべきに至らず。これに反し、前に列

淬勵奔勞す

犬豚と擇ぶな
し

掉尾の飛躍

記せる數者の齡傾きてなほ志せるところに、淬勵奔勞し、斃れて而
して後に已みしは、以て麗とすべからずと雖も、壯は則ち餘りあり。
人の世に處する、事を遂げ、功を奏せるもの何ぞ限らん。身を顯榮
の地に陞ししもの、また甚だ多し。然るも而して後十年、二十年、若し
くは三十年の餘命を保ちながら、却りて一事の成るなく、一功の舉
るなく、たゞ碌々無爲、食ひて臥し、覺めて食ふこと、犬豚と擇ぶなく、
爲に前年の功績を忘れられ、甚だしきは死生の分明ならざるあり。
彰著なる功を樹てて、幾何ならざるに世を捐つるか、然らずんば、老
に及びて掉尾の飛躍を演ずるか、いづれかその一出づるに非ず
ば、以て英雄の面目を完うし、盛名を久しきに傳ふる能はず。即ち春
の景色となるか、秋の景色となるか、必ず花々しき最期を遂げ、以て
一生を艶麗若しくは宏壯ならしむるを要すべし。但し秋に入りて
草木多く色を變じ、光彩燦爛一時の壯觀をつくし、然る後飄零凋殘

し去るとはいへ、これ等多くの草木を外にして、更に松柏の凋むに
後るゝあり。固より萬木悉く然りとし、一を以てすべてを律すべき
にあらず。かの松柏の屬、四時を貫きて緑を變へず、目を眩するの紅
彩、人を悦ばすの麗色を缺き、一歳の間特に觀て賞美する時なしと
雖も、その蒼幹數十丈、亭々として空を凌ぎ、天に參り、枝條は四方に
張りて蓋の如く、翳鬱として烟霧を罩め、隆冬を經、霜雪を冒し、長へ
に青を更めざる、實に變化の外に出づるものと謂ふべし。これある
か、これあるか。これまた察せずんばあるべからず。——想 痕——

(一)文學士、名は清。京都帝國大學助教。

自然と人間 「自修文」

成瀬 無極

「私はいつも世界を自分より偉大な天才者と考へた。」とゲーテはいつた。「自然」
すら背き去る文化は危い。自然は儼存してゐる。外國に旅して私はそれを感じ
た。自然と人間の交渉といふことを考へて見たい。

歸朝の途次我々の船はシンガポールに着いた。一步を陸上に踏入れて、私は

驚異の眼を見はつた。私に取つて全然未知の世界が展開された。往航は灰色の
太平洋の波浪を凌いで行つた。わびしい冬の旅であつた。今度は一個月餘の間
に殆ど四季を經過した。そしてここは常夏の國である。強烈な太陽の光を浴び
て、すべてがまばゆく輝いてゐる。土のいきれと草木の香とが劇しく鼻を撲つ
どこまでもどこまでも椰子の樹が生茂り、廣大な護謨林が續く。黒い皮膚をし
た土人の男女と、黄ばみ萎んだやうな支那人との間に、鶏や犬や豚の仔などが
うようよ歩いてゐる。飽きるほど見馴れた西洋婦人の白衣の姿などが、却つて
珍しい。長雨の後でもあつたらう、所々出水して、熱帯の草木が濁つた水溜り
の中へ枝を垂れ葉を浸し、小さな流に想ひがけず巨大な帆船が入つてゐたりし
た。

十二月だといふのに、^(一)オフィスでは皆ワイシャツ一枚になつて、額に汗しな
がら事務を執つてゐる。頭上を扇風機がせはしなく廻つてゐる。私たちは湯上
りの浴衣で、氷を添へた刺身を食べた。一年中單衣で通すといふ不思議な土地

Office.
事務室。

である。季候に變化がないから、却つて「時」が早く經つやうに思ふといふ。十二月から正月にかけてが、最好の季節と聞いた。然るに一方にはこれと正反對に、常冬の國もあるのである。不幸にして私はさういふ國に行つて見る機會がなかつたが、想像して見ることはできる。「紅い、顫へる圓板に似た太陽が、顫へる水平線に觸れるやうな時が來た。海の浪は動いてゐるまゝで氷結し、亂雜に積重ねた紫色の布のやうに見えた。我々の背後の雪の野原は、何億萬の氷の結晶に輝くスペクトラムとなつた。空中に高く珍しい虹色の雲が燃えてゐた。海豹、ペンギン鳥は姿を隠し、我々は骨の髓まで凍えながら小舎の前に立つて太陽の最後の光の輪が消えるまで——同時にすべての生活が終るまで待つてゐた。これはワッサーマンの小品「極光」の中に見える極地方の描寫である。

單に季節といふものを取つて考へて見ても、「常夏の國」と「常冬の國」との間に於て、その住民のテンペラメントに著しい相違がなくてはならない。テンパーまたはテンペラチュワーといふ言葉に依つても、また「氣象」といふ文字に依つても、自然と人間との交渉の密接なことがわかる。

- (1) Spectrum. 七色の景色。
- (2) Penguin.
- (3) Jakob Wasserman. オーストリアの小説家。(西曆一八七三年)
- (4) Temperament. 性質。氣質。
- (5) Temper. 氣性。
- (6) Temperatura. 氣候。

歐洲、殊に中歐は概して春秋が短く、冬から直ちに夏に變る。ベルリンの氣候はほゞ我が北海道のそれに該當するといふ。ロンドンの最好季節も、春といふより寧ろ初夏であらう。四季の微妙な推移を味はふ點に於て、日本は最も恵まれた國の一つといへよう。これ等の點がいかに國民性に影響して行くか。諸國に旅をして私は常にこのことを考へた。

或點で自然の形象が似てゐるらしいスペインと北歐諸國との間に、南と北とが形づくるコントラストはどんなものであらう。イタリーのナポリ邊の氣分、カフリ島からソレントあたりの風光に親しむと、凡そこれ等南國的類唐の氣象が、どういふ風に伊國人の氣質を醸成して來たかと考へさせられる。「甘き無爲」といふ心地は、スペイン、南佛あたりにもあらう。少くとも私はナポリとブダペストとに於て、その住民の氣質の上に幾多の類似點を見出した。「彼等は熱情的である。また藝術的天分に豊かである。音樂に舞踏に秀でてゐる。しかし、根のない焔である。國民としては亡國の民である。」と自國人を評したブダペスト生まれのG夫人の言葉を思ひ出す。

- (1) Contrast. 對照。
- (2) Capri.
- (3) Sorrento.
- (4) 類唐。おとろへること。
- (5) Budapest. ハンガリーの首府。

氣候と密接な關係のある自然の「形態」といふものも、また氣質の上に著しく影響を及すに違ひない。

昨夏スキスのインターラーケンに遊んで、「ハイムウエー・フルウ」といふ丘に登つて見た。郷愁が岡（一）とでも譯すべきであらう。この「郷愁」（二）といふ名が、私の興味を引いたのである。ケーブルカーを一人で占領して頂上に着いた。曇日なので、餘り遊覽の客もなかつた。非常に美しい眺望で、ユング・フラウが雪を戴いた清楚な姿を現し、一方にインターラーケンの市街を俯瞰し、静かな湖水を圍んで、緑の山が深い壁を疊んで、ゆつたりと立並んでゐる。「郷愁」といふ名の由來に就いては、案内記にも記してなく、茶店の婆さんや、繪葉書を賣る娘も知らない。「フルウ」とは土地の言葉で「岩壁」の義であるが、この景勝の所に來て郷愁を忘れるのか、または郷愁の念を起すといふのかわからないといふ。恐らく深碧な湖水を眺め、銀白な雪峰に圍繞されて、自ら一種の暗愁に捉へられるのであらう。月影を仰いでるゝるに二千里外の心を生ずるのと同様である。北歐山間の青年が廣い世間をこひ慕ふ心も諒解される。これに反して、

(1) Interlaken.
(2) Heimweh
Früh.

(3) Cable car.

(4) Jungfrau.

(1) Accent.

環境
周圍の状態。

臆測
心の中で推量
する。

海國の子は遙か浪の彼方に幸福の影を幻視するであらう。山國の人と海國の人との間には、皮膚の色を始め、眼、眉、口、全體の骨格その他にも著しい差異が認められるのであらう。ドイツで見ても、南北に依つて言葉のアクセントを別にし、發音に剛柔の差がある。すでに相貌言語の上に特徴があるとすれば、氣質の方面にもそれが存するはずである。凡そこれ等の觀察は、人文史の方面に於てはすでに過去に屬する陳腐の見方であるかも知れない。しかし、私は元來、ひたすら個人をのみ見てあらゆる環境を無視する態度を取つてゐた。一口に「英人は。」といひ、「獨人は。」といひ、「佛人は。」といふことの危険を知悉してゐる。殊に狭い日本に於てさへ、その生地^{（一）}に依つて直ちに人物の如何を臆測する早計と、所謂「愛郷心」なるものが意外の勢力を有して、政治上、經濟上までその影響を及し、單に郷土を同じくするが爲に黨閥を形づくり、互に他を排斥して自ら高しとする偏狹固陋を憎み嗤つた。ドイツの如きは絶えずこの分裂的思想の弊に苦しんでゐるのである。而してこの考は今日と雖も少しも變ることはない。國民性、或は一般に人間の氣質を形づくる上に於て、單に自然、國

傳統 血統を傳へる。轉じて風俗習慣或は學派や藝術の流派などを代々傳へること。

(一)昔八月十六日に諸國の牧場から貢進した馬を天皇が南殿で御覽になさる儀式。紀貫之の歌に「清水坂の關の清い影見えて今やひくらん望月の駒」といふのがある。(二)支那戰國時代孟嘗君の故事。遊子猶行於殘月。函谷鶏鳴。

土等の先天的要素ばかりでなく、歴史、經歷等の後天的要素のあることを併せて考へねばならない。また境遇の變化交錯といふことを斟酌する必要がある。即ち人物を品評する場合には、何よりもまづ「個人」として取りあつかふべきである。しかし、この事と境遇及び血統方面の考慮とは、兩立し得るものである。個性を觀察し、その個性を形成する諸要素を併せて探究することは、無用でないばかりでなく、屢々必要である。從來かやうな人文地理的及び歴史的方面を殆ど無視し、「傳統」を論外に置いてゐた私は、世界に旅して始めてその點に目覺めたやうに思ふ。

二三 東路の旅

東山のほとりなるすみかを出でて、逢坂の關うち過ぐるほどに、駒ひきわたる望月の頃もやうやう近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかにおとづれて遊子な

ほ残月に行きけん函谷のありさま思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のほとりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を弾きて心を澄まし、やまと歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風烈しきをわびつゝぞ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまで
こゝろをとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば、打出濱、栗津原など聞けども、未だ夜の中なればさだかにも見えわかず。昔、天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都遷ありて、大津の宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えて哀なり。

さゝ波や大津の宮のあれしより
名のみ残れる志賀のふるさと
曙の空になりて、勢多の長橋うちわたすほどに湖遙かに現れて、

故郷の志賀

(一)萬葉集の歌人、笠朝臣麿、養老頃の人。
(二)世の中を何にたとへんあさばらけ、こぎゆく舟のあとの白波。

(三)昆明春。昆明春。春池岸古春流新。影浸南山青。沈波沈西。山紅淵冷。白樂天。

かの満誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出でられて、漕ぎゆく舟のあとの白波、まことにはかなく心細し。

世の中を漕ぎゆく舟によそへつゝ、比叡山ながめし跡をまたぞながむる

このほどをも行過ぎて、野路といふ所に至りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖のしづく所せし。篠原といふ所を見れば、西、東へ遙かに長き堤あり。北には里人すみかを占め、南には池の面遠く見えわたる。向ひの汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして滉瀟たり。洲崎とところどころに入りちがひて、葦、かつみなど生ひわたれる中に、鴛鴦、鴨のうち群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔都を立つ旅人この宿にこそ泊りけるが、今はうち過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變り行く

世の習、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりと覺ゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより

あれのみまさる野路のしの原
行暮れぬれば武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空におとづれて、かの遺愛寺のほとりの草の庵の寢覺も、かくやありけんとな哀なり。行末遠き旅の空思ひ續けられて、いといたうもの悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬとこの秋風

音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の下の岩根より流れ出づる清水、あまり涼しきまで澄みわたりて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざるほどなれば、往還の旅人多く立寄りて涼みあへ

(一)近江國(滋賀縣)蒲生郡武佐村にある。今長光寺といふ。
(二)支那江西省九江北縣香爐峰の

りかの西行が、

道のべに清水流る、柳かげ

しばしとてこそ立ちどまりつれ

と詠めるも、かやうの所にや。

道のべの木かげの清水むすぶとて

しばしすまぬ旅人ぞなき

柏原といふ所を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底

におとづれ、山風松の梢にしがれわたりて、日影も見えぬ木の下道、

哀に心細し。越えはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけ

りに見ゆるにも、後京極攝政殿の荒れにし後はたゞ秋の風」と詠ま

せ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、鄙

しき言の葉をのこさんもなかなかに覺えて、ここをば空しくうち

過ぎぬ。

(一)藤原良經。
(二)一人すまぬ不破の關屋の板庇にし後はたゞ秋の風。(新古今集)

(一)美濃國(岐阜縣)不破郡を流れてゐる。
(二)水の面に照る月なみなかぞふれば、かよひぞ秋の最中なりける。(拾遺集、源順)

株瀬川といふ所に泊りて、夜ふくるほどに、川端に立出でて見れば、

秋の最中の晴天、清き川瀬にうつろひて、照る月波も數見ゆるばかり

澄みわたれり。二千里の外の故人の心遠く思ひやられて、旅の

思いとど抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、花洛を出でて

三日、株瀬川に宿して一宵、しばしば幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、

かつがつ遠情を前途一千里の雲に送る。など、或家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも

かゝる旅寢の月を見んとは

かゝる旅寢の月を見んとは

後記ノ要リ、その排句ノハ

東關紀行

改訂帝國新讀本 卷九 終

大正十三年十一月三十日發行
 大正十四年十二月十六日發行
 昭和二年二月二十四日發行
 昭和三年五月十一日發行
 昭和四年四月二十二日發行
 昭和五年二月二十四日發行
 昭和六年一月十四日發行
 昭和七年五月十四日發行
 昭和八年五月十四日發行
 昭和九年五月十四日發行
 昭和十年五月十四日發行
 昭和十一年五月十四日發行
 昭和十二年五月十四日發行
 昭和十三年五月十四日發行
 昭和十四年五月十四日發行
 昭和十五年五月十四日發行
 昭和十六年五月十四日發行
 昭和十七年五月十四日發行
 昭和十八年五月十四日發行
 昭和十九年五月十四日發行
 昭和二十年五月十四日發行

(本讀新國帝訂改)

價		定	
卷九	至卷八	自卷四	至卷一
十九各	金參拾四錢	各金四拾壹錢	各金四拾六錢

昭	和	五	年	度
昭	和	五	年	度
十	三	年	十	月
三	年	十	月	三
十	月	三	日	十
三	日	十	月	三
十	月	三	日	十
三	日	十	月	三
十	月	三	日	十
三	日	十	月	三

昭和六年度 金五拾四錢

浦野製



編者 芳賀 矢一

發行所 合資 富山房
 東京市神田區通神保町九番地

代表者 合資 富山房社長 坂本 嘉治 馬

印刷所 東京市小石川區音羽町六丁目 富山房印刷工場

發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資 富山房

電話神田 二一四一・二一四二・二一四三
 振替口座東京 五〇一四三番

發行所

發行所

發行所



Vertical text in the top left corner, likely a title or introductory text.

一	二	三
四	五	六
七	八	九
十	十一	十二
十三	十四	十五
十六	十七	十八
十九	二十	二十一
二十二	二十三	二十四
二十五	二十六	二十七
二十八	二十九	三十

一	二	三
四	五	六
七	八	九
十	十一	十二
十三	十四	十五
十六	十七	十八
十九	二十	二十一
二十二	二十三	二十四
二十五	二十六	二十七
二十八	二十九	三十

Vertical text columns in the middle right section, possibly a list of contents or a detailed description.

Vertical text on the left edge of the right page, possibly a date or publisher information.

Small vertical text at the bottom left of the right page.

第五學年 第三級

乃美祥美

